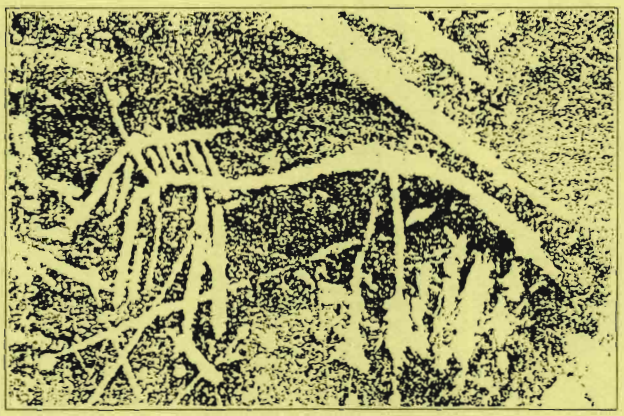
スライドによる

入門考古学講座

―横穴墓とは何か―



神奈川県考古学会
川崎市市民ミュージアム

表紙カット　王禅寺白山横穴墓の線刻画(馬)

スライドによる

入門考古学講座

テーマ

横穴墓とは何か

横穴墓用語解説……上田　薫
神奈川の横穴墓……上田　薫
平塚市岡崎城山横穴墓……明石　新
伊勢原市域の横穴墓……立花　実
鎌倉市内の横穴墓……継　実
横浜市矢崎山横穴墓群・
綱崎山横穴墓群…鈴木　重信
川崎市間際根横穴墓群……田村　良照
多摩川流域の横穴墓……松崎　元樹
横穴墓研究から何が分かるか…池上　悟

1994・2・6

神奈川県考古学会

川崎市市民ミュージアム

横穴墓用語解説

◎横穴墓〔おうけつぼ〕－古墳時代後期を中心に造られた墓で、横穴（よこあな）、横穴古墳（おうけつこふん）とも呼称される。古墳のように土を盛って造られたのではなく、丘陵の斜面や崖を利用し、そこをトンネルのように穴を掘りすすめて洞穴（ほらあな）を造り、その奥に遺体を安置した埋葬施設（まいそうしせつ）である。単独ではなく、群で構成される例が多い。北九州で５世紀の後半代に造られるようになり、やがて東へ東へと伝わり、神奈川県内では６世紀後半代から８世紀前半代にかけて盛んに造られた。横穴墓は基本的には当時の有力者の家族墓であったと考えられており、通常内部から数体の人骨が発見されるが、十数体もの人骨が発見された例もある。横穴墓は、その構造・形態において極めて変化に富んでいるが、基本的には内部施設である玄室（げんしつ）・羨道（せんどう）、外部施設である前庭部（ぜんていぶ）によって構成されている。なお神奈川県は全国でも有数の横穴墓の密集地として知られ、現在まで 3,000基以上の存在が確認されており、同時期の古墳の数をはるかに上回っている。

＊アーチ形〔あーちがた〕－天井の断面がアーチのような形をした横穴墓。

＊家形〔いえがた〕－玄室の構造が家の形をしている横穴墓。形は大きく寄棟（よせむね）造りと切妻（きりづま）造りとに分類される。壁を刻んで垂木（たるき）や梁（はり）が忠実に表現されたものも存在する。

＊石積〔いしづみ〕－前庭部奥から羨門にかけて、河原石を積み上げた施設。

＊奥壁〔おくへき〕－横穴墓の最奥部の壁。

＊貝床〔かいしょう〕－貝殻を敷いた床。貝の種類はハマグリ・カキ・ヤマトシジミ・ダンベイキサゴなど。

＊片直企画〔かたちょくきかく〕－片側壁に対して奥壁が直行する、特異な設計の横穴墓。

＊龕〔がん〕－奥壁や側壁を堀り込んでつくられた小規模な施設。河原石が敷かれ、骨粉（こっぷん）が検出された例もある。

＊棺座〔かんざ〕－玄室内の遺体を安置する施設で、奥壁ないしは側壁に接して玄室の床面よりやや高く築かれる。棺台（かんだい）・棺床（かんしょう）または屍床（ししょう）とも呼称されている。

＊棺室〔かんしつ〕－玄室の奥壁中央を、玄室の床よりかなり高い位置に奥に堀込んで小部屋を築いた施設。

＊矩形〔くけい〕－横穴墓の平面形が、長方形を呈するもの。

＊組合式石棺〔くみあわせしきせっかん〕－石を板状に加工し、それを長方形に組合せて構築した棺（ひつぎ）。

＊群〔ぐん〕－横穴墓は単独で存在することが少なく、限られた区域にまとまって存在する例が多い。このまとまりを群と呼び、群の中のさらに小さなまとまりを支群（しぐん）または小群（しょうぐん）と呼ぶ。

＊玄室〔げんしつ〕－横穴墓の主体をなす、最奥部に位置する遺体を安置した部屋。床面にはこぶし程の大きさの川原石を敷きつめる例が多く見受けられる。またごくまれに貝殻が敷かれている例も認められる。

＊玄門〔げんもん〕－玄室の入口で、玄室と羨道との境の部分。

＊高棺座〔こうかんざ〕－通常の棺座よりかなり高く構築されたもの。２ｍに達するものも存在する。

＊石障〔せきしょう〕－棺座の手前に長方形の切り石を並べ、縁をかたどったもの。

＊線刻画〔せんこくが〕－クギ状の工具を使用して、奥壁や側壁の一部分を刻んで

描かれたもの。人物や動物、建物などを描いたものや、意味不明の抽象的文様などがある。

＊前庭部〔ぜんていぶ〕－横穴墓の入口に位置する広場のような空間の外部施設。墓前域（ぼぜんいき）・墓道（ぼどう）・導入部・切通しとも呼称される。一般的に死者を供養する、墓前祭祀（ぼぜんさいし）の場であったと考えられている。土器などの遺物が発見される例も多い。

＊羨道〔せんどう・えんどう〕－横穴墓の入口から玄室に通じる道。かがまなければ入れないような低い天井のものが多い。玄室との区分が不明瞭なものも多く存在する。

＊羨門〔せんもん〕－横穴墓の入口の閉鎖施設。通常ロームブロックや河原石等を積み上げてふさがれている。

＊側壁〔そくへき〕－横穴墓内の左右の壁。

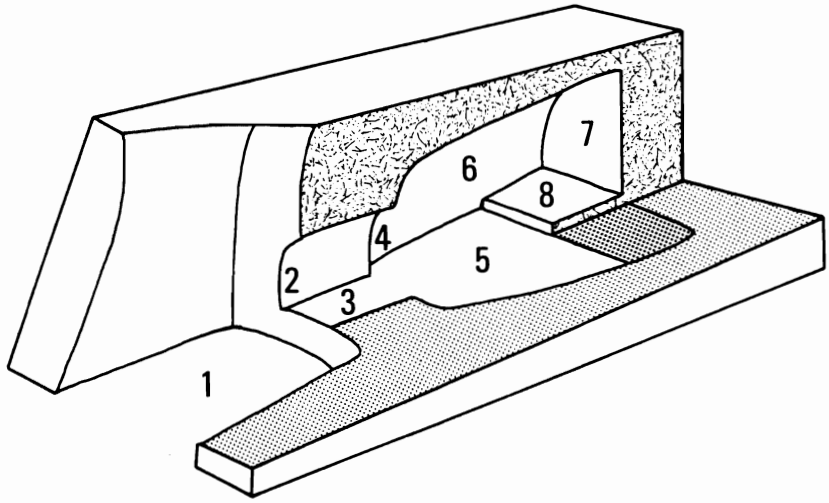
＊袖〔そで〕－玄室と羨道の区分の明瞭な横穴墓で、玄室の左右の広がりを呼ぶ。左右の広がりのあるものを両袖、片方しか広がりがないものを片袖と呼ぶ。

＊造付石棺〔つくりつけせっかん〕－玄室内の遺体を安置する施設で、横穴墓の基盤層である凝灰岩やローム層をていねいに削り出して棺の形に整えたもの。奥壁ないしは側壁に接して築かれる。

＊天井〔てんじょう〕－構築された時期や地域によってその形は微妙に異なる。代表的なものとして、家形・アーチ形・ドーム形などがある。

＊胴張り形〔どうばりがた〕－玄室の左右側壁が、中央でややふくらみを持つ形態の横穴墓。古墳の横穴式石室の影響を強く受けたと考えられている。

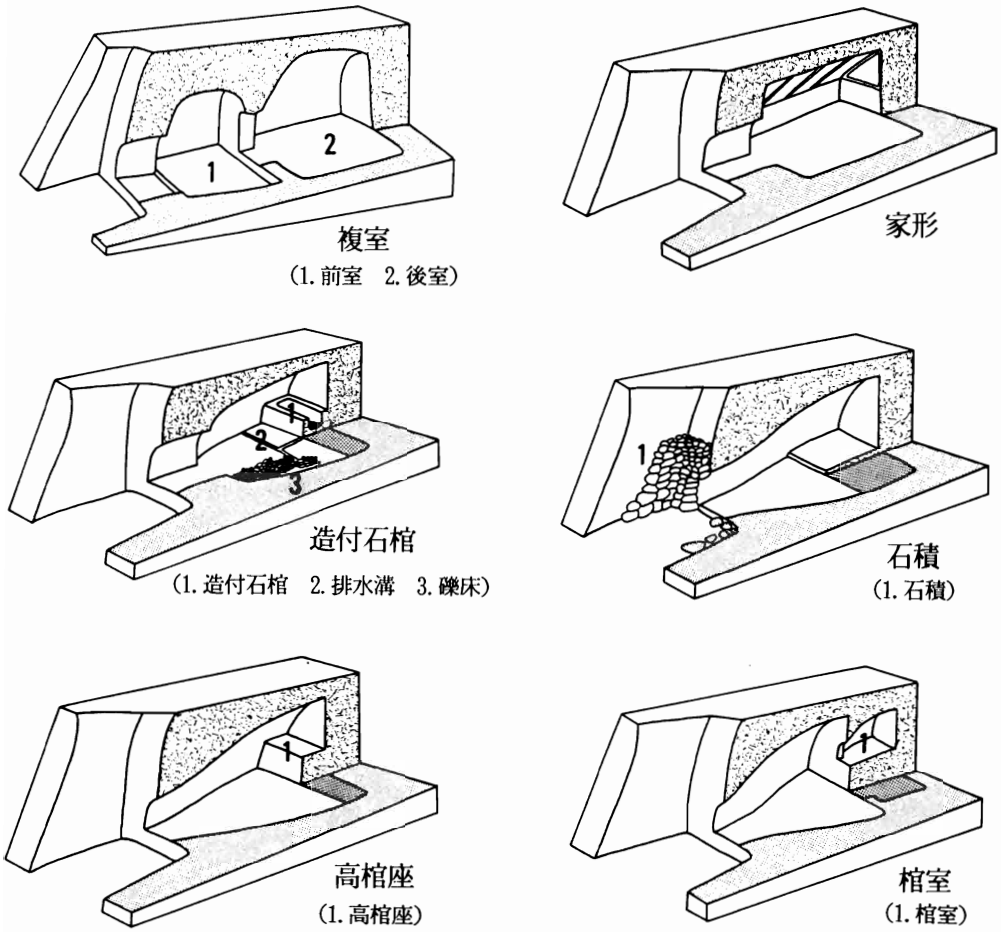
＊徳利形〔とっくりがた〕－内部形態が徳利を半分に割ったような形をした横穴墓。



横穴墓各部の名称

1．前庭部（ぜんていぶ）　2．羨門（せんもん）　3．羨道（せんどう）
4．玄門（げんもん）　5．玄室（げんしつ）　6．側壁（そくへき）
7．奥壁（おくへき）　8．棺座（かんざ）

＊ドーム形〔どーむがた〕－天井の断面がドームのような形をした横穴墓。
＊排水溝〔はいすいこう〕－横穴墓内部にたまった水を、外部に排出するために掘られた細い溝。多くは側壁に沿って掘られている。
＊羽子板形〔はごいたがた〕－平面形が羽子板状を呈する横穴墓。
＊撥形〔ばちがた〕－平面形が三味線のばちのような形をした横穴墓。
＊複室〔ふくしつ〕－玄室が二部屋に分かれているもの。奥の部屋を後室（こうしつ）・奥室（おくしつ）・主室（しゅしつ）、手前の部屋を前室（ぜんしつ）と呼ぶ。
＊縁〔ふち〕－棺座の手前の部分をやや高く盛上げた突帯（とったい）。壁障（へきしょう）とも仕切（しきり）とも呼ばれる。
＊ミニ横穴墓〔みにおうけつぼ〕－成人の遺体を伸展（しんてん）状態で安置することが不可能な、小規模な横穴墓。幅、奥行きとも１ｍに満たないものも存在する。
＊礫床〔れきしょう〕－こぶしほどの大きさの河原石を使用した、石敷きの床。



県下の特徴的な構造の横穴墓

神奈川の横穴墓

上田　薫

１．県下の横穴墓の分布

横穴墓は５世紀後半代に北九州の豊前地域で発生した、わが国独自の葬法である。この新たな葬法は、およそ１世紀後には東北地方南部にまで伝播する（図１）。横穴墓は九州から東北地方南部まで、細長い日本列島の西から東に帯状に広く分布するが、その分布にはへだたりがある。

神奈川県は、北九州地方・山陰地方と並んで全国的にも横穴墓の分布密度の濃い、静岡県から宮城県にまたがる東日本太平洋沿岸地帯の一翼をになう地域である（図２）。これまでに把握されているところでは、すでに消滅したものを含めて約 550 群 3,200基を数え、年々新たな発見が報告されている。面積において全国43番目の極めて狭い地域でありながらも、これだけ多くの横穴墓がひしめきあっている。首都圏に位置し、他県に比べて開発が著しく進行し、それに伴っての発見が多いことを考慮しても、その密度は全国でもトップクラスに位置づけられよう。

横穴墓の分布は、全国的に必ずしも均等ではないが、神奈川県内においてもその分布のありかたには片寄りがあり、全県的に必ずしも等しく分布しているわけではない。神奈川県は相模地域と武蔵地域の、大きく二つの地域によって構成されているが、横穴墓が濃密な分布を示す地点としてで相模地域三ヶ所、武蔵地域で一ヶ所があげられる。

相模地域で最も濃密な分布を示す地点は、大磯町を中心に、二宮町、平塚市西南部にまたがる大磯丘陵の一帯である（図３の１）。次に密度の度合いが高いのは、藤沢市の片瀬丘陵を西端とし、東の鎌倉・逗子市、さらには横浜市の南部を含めた一帯である（図３の２）。これらの二ヶ所には密度の点でやや劣るが、三浦半島の東京湾岸沿いを中心に分布域

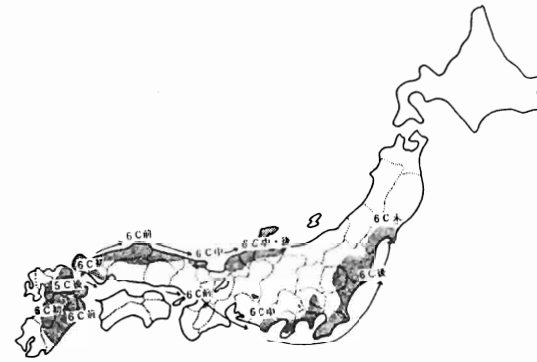


図１　横穴墓の伝播

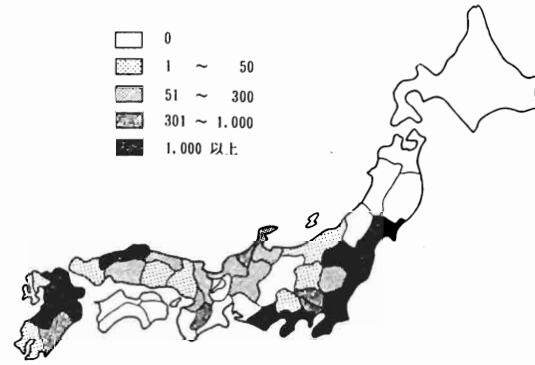


図２　都道府県別横穴墓数

図３　神奈川県の横穴墓の分布

が認められる（図３の３）。この他に相模地域では、相模川流域、金目川流域の内陸部にも分布が認められ、近年発見例が増加しつつある。以上が相模地域における横穴墓分布の概観であるが、海岸沿いを中心に濃密に分布することを指摘できよう。

武蔵地域においては、北部の多摩川と鶴見川にはさまれた多摩丘陵の南端部を中心に広範な分布が認められ、分布が極めて稀薄な南部と好対照を示している（図３の４）。

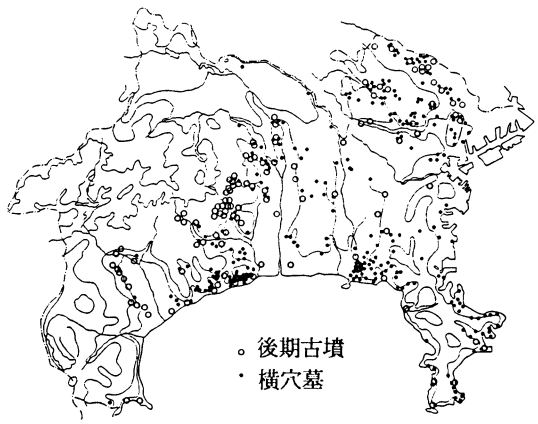


図４　神奈川県の後期古墳と横穴墓の分布

これらの横穴墓の分布と、ほぼ同時期に構築された後期古墳との分布を比較すると（第４図）、多摩川と鶴見川にはさまれた地域には両者が併存し、大磯丘陵、相模湾内部の東部地域および三浦半島においては横穴墓の分布が優位であり、内陸部の厚木・伊勢原・秦野市を中心とした地域および酒匂川右岸一帯では古墳の分布が優位である。おおまかではあるが、横穴墓の分布が優位な地域には、古い時期の所産の古墳が少なく、古墳の分布が優位な地域には、より古い時期の所産の古墳が多く存在する傾向を指摘できそうである。

２．神奈川県の横穴墓研究史

横穴墓の存在は、近代的考古学が確立された明治時代以降ではなく、それ以前の江戸時代には広く一般庶民に知られていたと考えられる。もちろんその本来の性格や用途を知ることなしに、それが民間信仰と結び付いている例が県内には以外と多い。内部に五輪塔が置かれていたり、不動尊や観音像が祭られていたり、そこが権現社や札所となっている例が現在でも各地で認められる。このように横穴墓は、江戸時代の庶民にとって、今日我々が想像する以上に身近な存在であったろうし、考古学的遺構の中で最も人々の目に触れる機会の多かった遺構であると言っても過言ではなかろう。当然ながら当時の文献にも横穴墓は登場している。江戸時代末に編纂された新編武蔵風土記稿および新編相模風土記稿には巖窟（がんくつ）、岩穴（いわあな）、人穴（ひとあな）、洞穴（ほらあな）と言った呼称で横穴墓に関する記事がいくつか紹介されており、出土した遺物の図が掲載されている例も認められる（図５）。さらに記事の中には、これを昔の地位のある者の墓であると的を得た見解を示している点が注目される。

明治時代に入り、学問的目的をもった発掘調査が実施されるようになるが、その代表は坪井正五郎によって調査された、埼玉県の吉見百穴横穴墓群である。この調査によって坪井は横穴墓穴居説を提唱し、これに対して白井光太郎等が横穴墓は墳墓であるとする立場から論争をいどんだ。学史に名高い穴居（けっきょ）論争である。こうした論争もあって、横穴墓は明治時代を通じて最も注目を浴びた遺構の一つであった。神奈

図５　新編武蔵風土記稿に掲載された横穴墓出土の遺物

川県の横穴墓も、東京近郊と言う地理的条件に恵まれてか、当時の研究者による報告がいくつか成されている。

明治時代の末になり、横穴墓が墓であると言う認識が定着してくると、横穴墓の研究は下火となり、それは神奈川県においても同様であった。停滞した神奈川県の横穴墓研究が新たな局面を迎えるのは、大正時代末の赤星直忠氏の登場を待たねばならなかった。赤星氏は考古学の領域全般にわたって数多くの業績を残されたが、横穴墓に関しては一地域においての徹底した踏査の実施と言う研究姿勢が、全国的に停滞気味であった横穴墓研究の以後における一つの指針となった。

神奈川県において数々の横穴墓の調査を行った赤星氏が、戦後その研究の集大成として発表したのが、横穴墓形態の編年模式図（図6）である。これは全国的にも初めての試みであり、その後の横穴墓の構造変遷論の土台となったものとして学史的に極めて意義あるものであった。

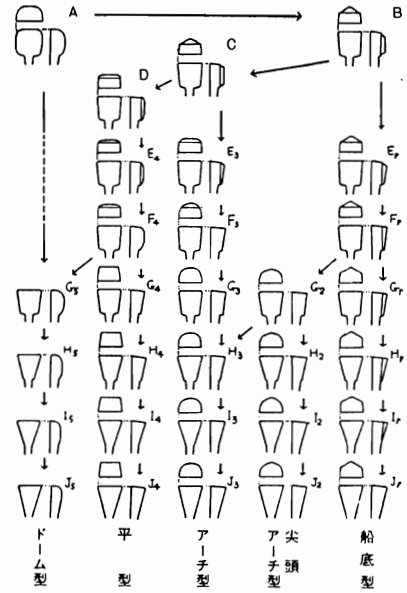


図6　赤星氏の編年模式図

昭和31年に実施された横浜市の市ヶ尾横穴墓群の調査は、横穴墓の外部施設である前庭部が初めて確認され、それ以降の横穴墓の調査に大きな変革をもたらした。

昭和41年には神奈川県下の例を取り上げて、横穴墓の被葬者に関する論文が阿部黎子氏によって発表される。横穴墓の被葬者は一般庶民でなく、郡司、里長などの在地豪族、あるいは朝廷によって東国に送り込まれた氏族集団であると推察し、被葬者の性格に関して大きな問題提起を行った。

以上のように、戦後から昭和40年代にかけて、神奈川県を基盤としての論文の発表や新たな発見もあって、この時期神奈川県は横穴墓研究者に最も注目を浴びた地域であったと言えよう。

近年は大規模開発に伴って、大規模な調査が実施されるようになり、横穴墓を群単位で調査することが可能となった。これにより群中における横穴墓の構造の変遷を把握することが試みられている。その結果、神奈川県内の横穴墓が画一的に変遷するのでなく、地域的にかなり様相を異にしていることが明かとなりつつある。

3．横穴墓研究の展望と課題

横穴墓研究には多くの課題が残されている。伝播の問題ももちろんであるが、この他にも横穴墓と古墳の関係（同時期に二系統の墓が存在するのはいかなる訳か、分布の差異をどのように理解するか被葬者にどのような差があったのか）、横穴墓とそれを営んだ集落の問題（横穴墓に葬られた集団が、どこに住んでいたか明確にされた例はほとんど無い）、横穴墓の終末の問題（なぜ造られなくなるのか）等々、まだまだ克服しなければならない多くの問題を抱えている。

横穴墓研究は、これまで古墳時代の墓制研究においていわば傍流的研究領域として推移してきたが、全国各地において横穴墓の位置づけに関して、新たな視点から見直しをはかる気運が盛り上がりつつある。

平塚市岡崎城山横穴墓

明石　新

Ⅰ　城山横穴墓の概要

現時点での平塚市内には１５群１６８基が確認（註１）されている。これらは大磯丘陵と岡崎台地に分布し、前者に１１群、後者に２群が認められる。高根横穴墓（２６基）、万田熊ノ台横穴墓（２２基）、万田宮ノ入横穴墓（１３基）、万田八重窪横穴墓（５３基）、根坂間横穴墓（２６基）などが代表的なものである。

岡崎城山横穴墓の存在は古くから知られている（註２）が、本格的な調査が行われたのは昭和５１年（註３）である。

今回は第２回目になり、平成４年１０月～平成５年６月までに、西側ブロックの８基、東側ブロックの４基の計１２基を平塚市教育委員会が調査した。西側ブロックの特徴は横穴墓の変遷過程での段階では新しい部分（註４）に相当し、東側ブロックは古い段階のものである。特に今回発表する７号横穴墓は、構造や出土遺物から平塚市内にあっては最も古い段階のものと考えいる。

Ⅱ　特記事項

今回の調査によって知り得たことを箇条書きに記しまとめとする。

１　従来から周知された横穴墓ではあったが、今回の調査や聞き書き、及び周囲の地形から、その数は２０基以上のものとなり、市内にあっては規模の大きな横穴墓群であると推定される。

２　東・西ブロックの調査から古い段階から新しい段階のものが確認された事は横穴墓の変遷過程を知る上で貴重な資料を得ることができた。

３　西ブロックでは前庭部の調査を行うことができた。

４　東ブロックではまとまった遺物が出土している。

５　人骨は１・３・６～８号横穴墓から出土しており、その出土状態から追葬が行われたことが確かめられた。歯の分析や人骨の成分分析によっては被葬者の血縁関係が追求できるものと考える。

６　東ブロック４基はいずれも古式のものであり、特に７号横穴墓は本横穴墓の中では最も古いものである。市内にあっては古い段階の１つである。ちなみに万田熊ノ台横穴墓群の１９号横穴墓や根坂間横穴墓群４号横穴墓は古い段階のものである。これらに共通する構造は玄室平面形態が正方形・長方形をなすものである。天井部は前者がドームタイプ、後者がアーチタイプのものである。これらと比較した場合、構造的に丁寧に構築されている点から、時間的な差があるとするならば、市内最古のものと考える。

７　７号横穴墓は相模川流域では最古のタイプであり、県内にあっても最古のタイプの１つといえる。その構築年代は６世紀後半に求めることができるものと考える。

註１　横穴墓の分布・基数は以下の文献による。
樋口清之・金子皓彦：1976「平塚市遺跡分布調査報告書Ⅰ・Ⅱ」平塚市博物館。明石新：1985「相模川流域の横穴墓」平塚市博物館。

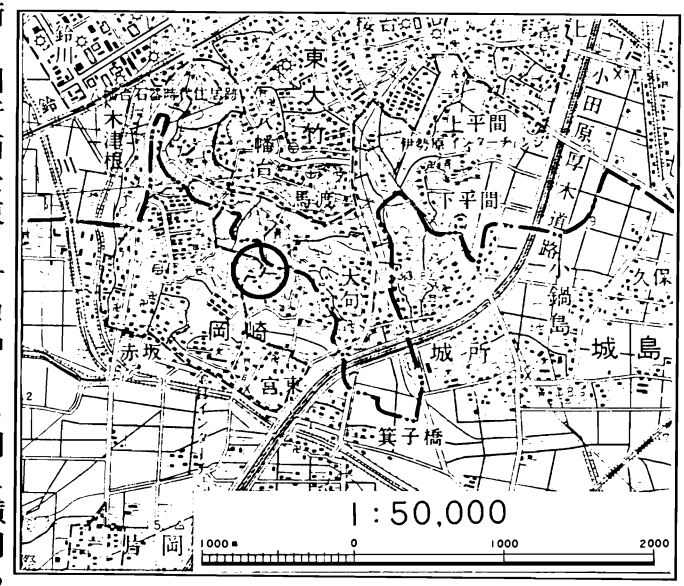
註２　赤星直忠は昭和８年に当地域を踏査され、その成果を発表されている。1970「穴の考古学」学生社ｐ95・96に収録。

註３　明石新：1983「平塚市岡崎より発見された横穴墓について」『自然と文化』第６号平塚市博物館

註４　平塚市内の横穴墓の変遷を大きく４段階に設定し、その過程を発表した。
明石新：「根坂間横穴墓Ｂ支群」平塚市埋蔵文化財シリーズ１４　平教委

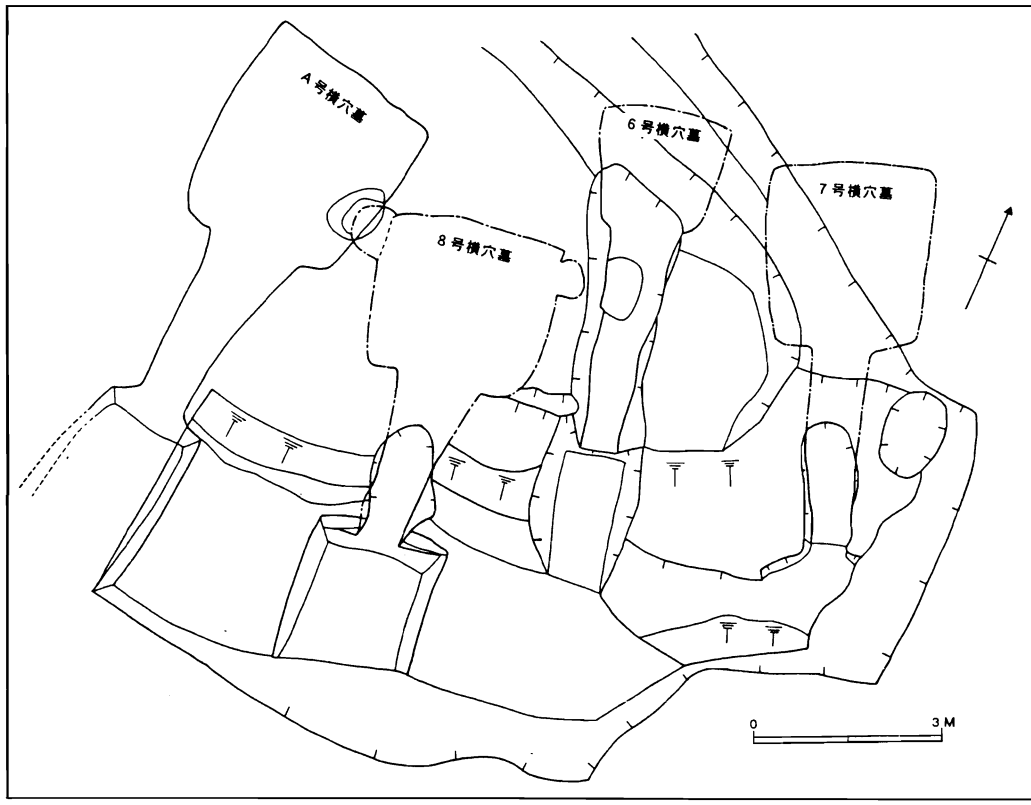
Ⅲ　遺跡の位置と立地

岡崎台地は伊勢原市の市街地より続き、西・南を鈴川、東・北を渋田川の氾濫原に囲まれている。台地は東に解析した支谷が発達しており、西は伊勢原断層が走り急な崖を形成している。本横穴墓は東から１つめの谷戸、南から２つめの台地の南斜面に位置する。標高14～15mの武蔵野ローム層（約３～７万年前）中の東京パミス（約５万年前）の下位の武蔵野埋没土を穿って構築されている。平塚市岡崎入山瀬字城山に所在することから、字名をとって城山横穴墓とした。周辺の台地は岡崎城跡として周知されているが良く分かっていない。



○印　調査位置

Ⅳ　遺跡全体図



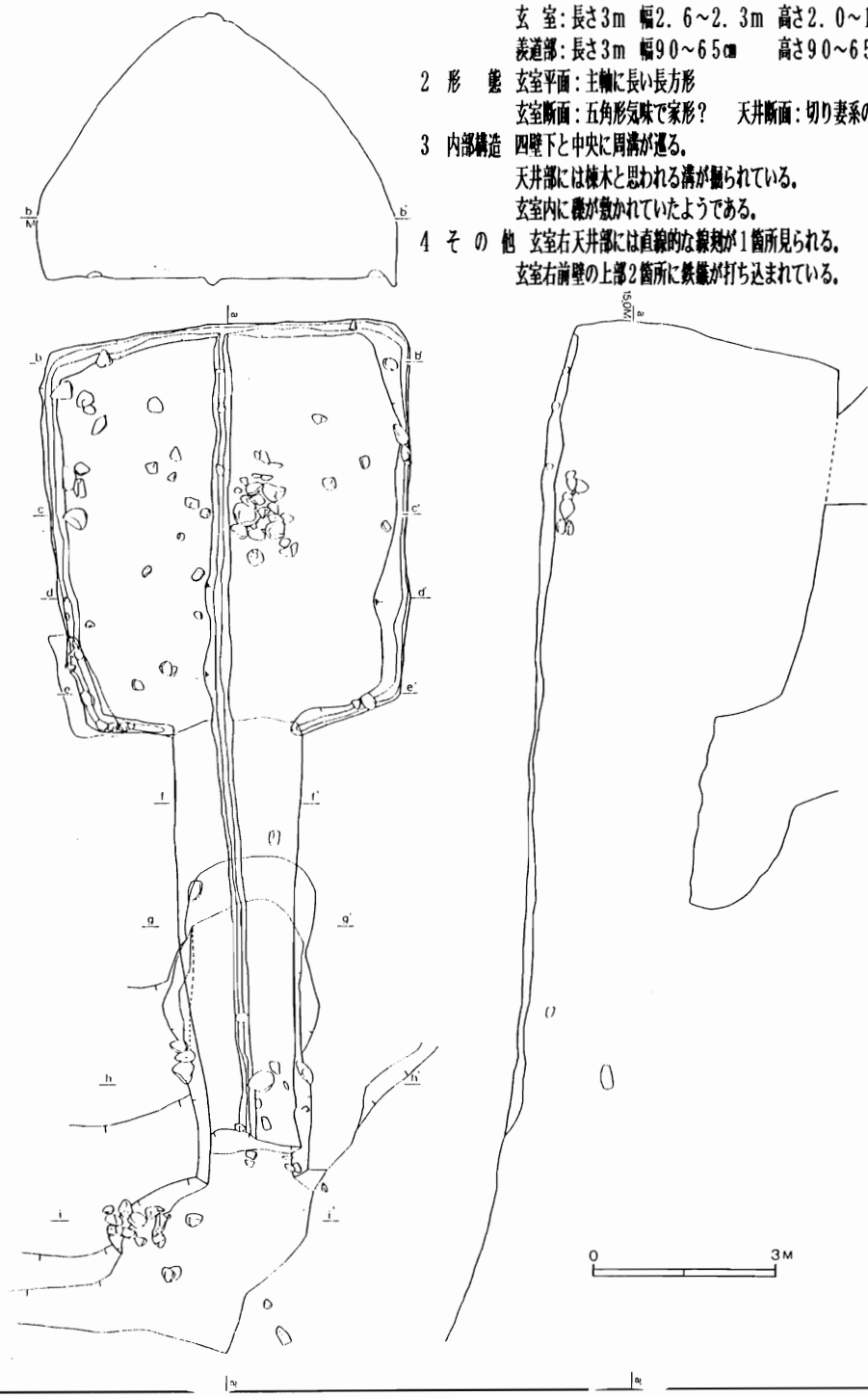
V　7号横穴墓実測図

1 規　模　全 長：6．8m
　　玄 室：長さ3m　幅2．6～2．3m　高さ2．0～1．8m
　　羨道部：長さ3m　幅90～65㎝　　高さ90～65㎝

2 形　態　玄室平面：主軸に長い長方形
　　玄室断面：五角形気味で家形？　天井断面：切り妻系の屋根

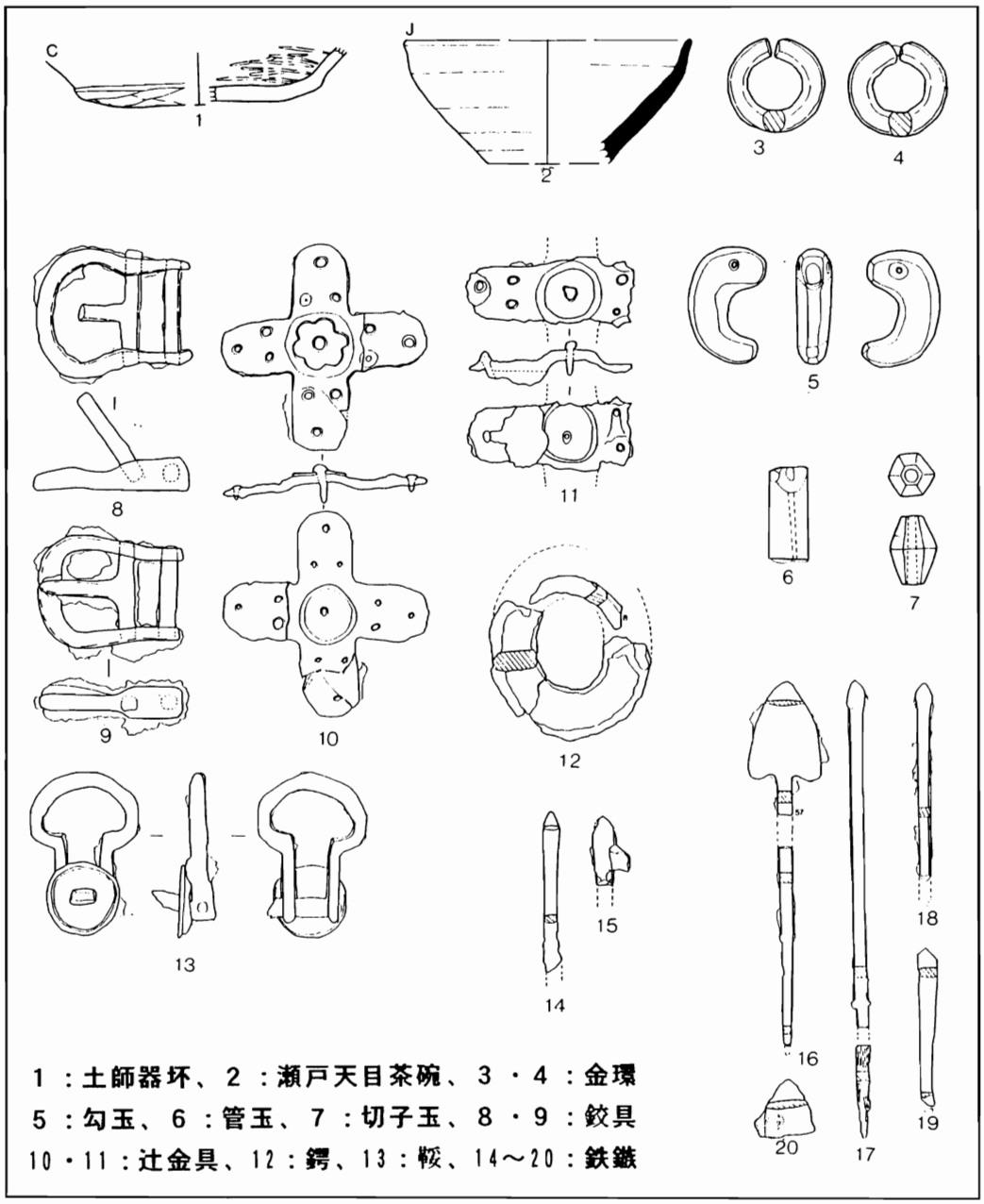
3 内部構造　四壁下と中央に周溝が巡る。
　　天井部には棟木と思われる溝が掘られている。
　　玄室内に礫が敷かれていたようである。

4 そ の 他　玄室右天井部には直線的な線刻が1箇所見られる。
　　玄室右前壁の上部2箇所に鉄鏃が打ち込まれている。



Ⅵ　7号横穴墓遺物実測図

出土遺物　土　器：土師器坏・須恵器壺・天日茶埦
　　鉄製品：直刀・刀子・鉄鏃・鉸具・辻金具・鞍・
　　装身具：金環・勾玉・管玉・切子玉・ガラス玉・琥珀玉
　　人　骨：歯等が出土しているが、現在同定中。
出土状態　全体的に浮いた状態で確認された事は、原位置を示すものではなく内部が中世に荒らされたものと考える。



1：土師器坏、2：瀬戸天目茶碗、3・4：金環
5：勾玉、6：管玉、7：切子玉、8・9：鉸具
10・11：辻金具、12：鍔、13：鞍、14～20：鉄鏃

伊勢原市域の横穴墓

立花　実

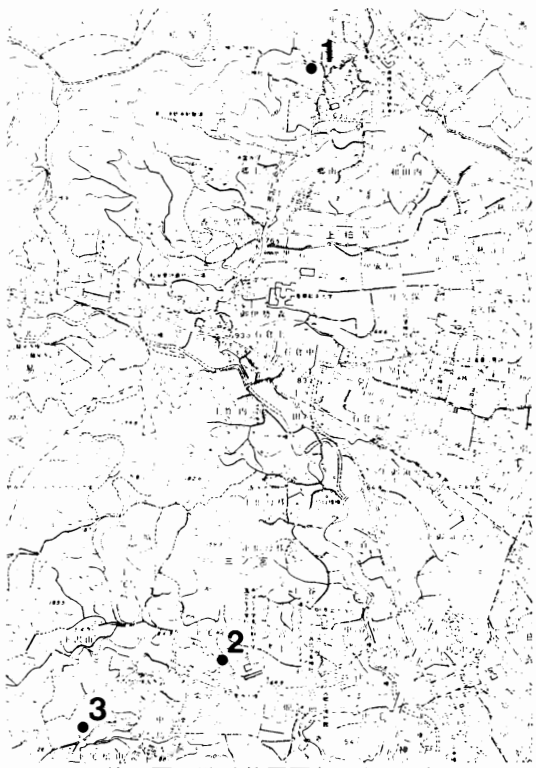
伊勢原の地形と横穴墓

伊勢原市は神奈川県の中央部、相模川の西岸に位置する。行政境では北と東を厚木市、西を秦野市、南は平塚市と接している。地形的には丹沢山塊の東麓、標高1200mを越す大山を筆頭に、徐々に高度を下げながら続く丘陵部、その間を流れる大小の河川、それによって開析された谷部と沖積地、そして相模川流域には標高わずか数mの低地がひろがっている。このような変化に富んだ地形は恵まれた生活条件の一つであったらしい。市域では人が住んでいなかった時代はないといえるほど、連綿と各時代の遺跡がみつかっている。古墳時代後期も例外ではなく、伊勢原市域は多くの古墳が分布することで古くから著名である。その影で横穴墓はほとんど注目されてこなかったといえる。昭和初期の分布調査では市内三ノ宮地区だけでも35基の横穴墓が確認されているが（文献１）、その後ほとんど調査は進んでおらず、市域の横穴墓については現在でもその実態は掴めていないのが実情である。

ところがこの数年間に相次いで横穴墓の調査を実施する機会に恵まれ、不明瞭であった伊勢原市域の横穴墓についてもおぼろげながら特色がみえてくるようになった。今回はそれら最近の調査結果を簡単に紹介してみることにしよう。

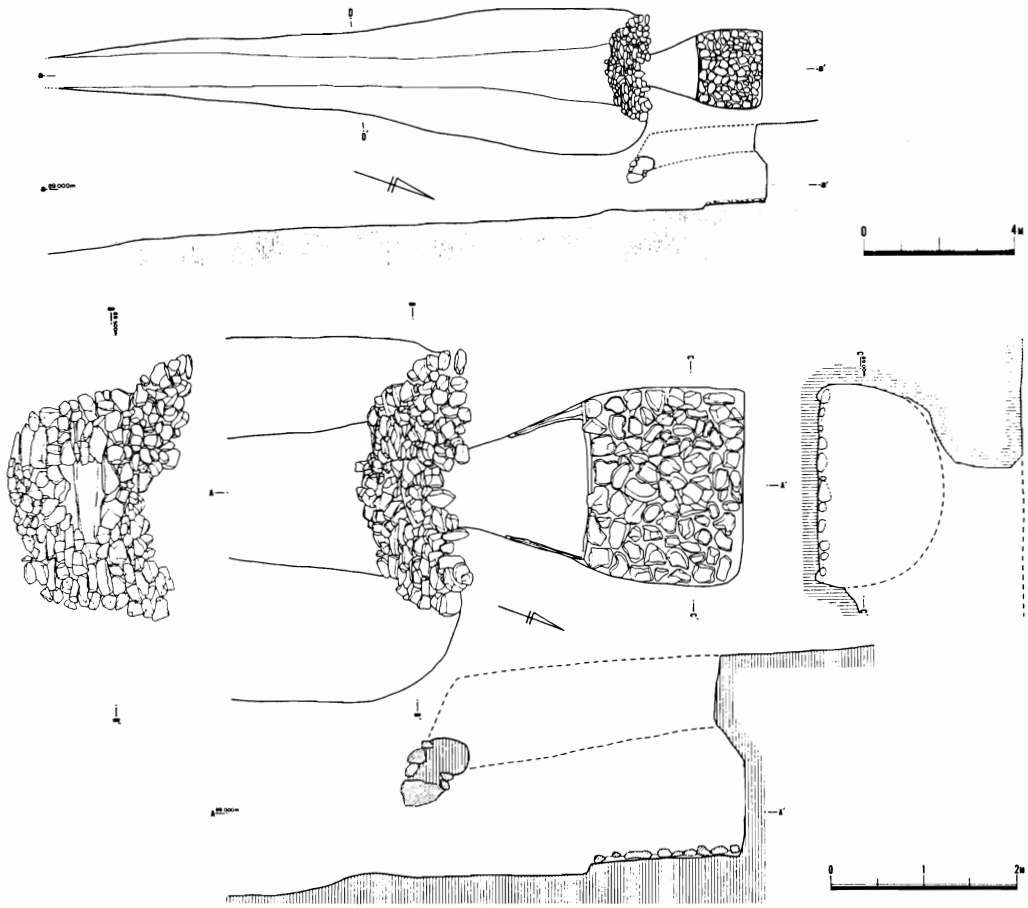
伊勢原市域の横穴墓の特性

今回取り上げる遺跡は、３つである。平成元年に調査した上粕屋・一ノ郷北遺跡（第１図１）では、長さ15mを測る道状の前庭部と羨門前面に石積施設をもつ横穴墓を検出した。三ノ宮・下尾崎遺跡（同２）では平成元年から２年にかけて17基の横穴墓を調査した。確認しただけのものを含めると25基となり、本来は40基以上からなる横穴墓群であったと考えられる。そこから西方600mの所には 平成５年に調査した三ノ宮・上栗原遺跡（同３）がある。この遺跡では確認した15基のうち、13基を調査したが、周辺には他にも横穴墓が存在し、全体では下尾崎遺跡を凌ぐ規模の横穴墓群となる可能性がある。これら３遺跡で伊勢原市域の横穴墓の実態を語るわけにはいかないが、いくつかの特性を指摘することはできる。



第１図　遺跡位置図(S=1/3,000)

まず第一に出土遺物が豊富なことである。土器は前庭部からの出土が目立つ。下尾崎遺跡第11号横穴墓では須恵器の甕が２個体とフラスコ形長頸瓶、高坏が前庭部左側の壇上に据え置かれた状態で出土した。この他に下尾崎遺跡第２号、第10号、第23号、上栗原遺跡第１号、第４号横穴墓でも前庭部から甕が出土している。一方、玄室内からは土師器の坏、須恵器の平瓶、フラスコ形長頸瓶、長頸瓶が出土し、甕はみつかっていない。前庭部と玄室とではどうも土器の用い方が違うらしく、それは副葬、葬送儀礼、墓前祭祀といった死者、或いは祖先を祀る祭祀の差に由来すると考えられる。鉄製品の出土も多い。下尾崎遺跡第１号横穴墓

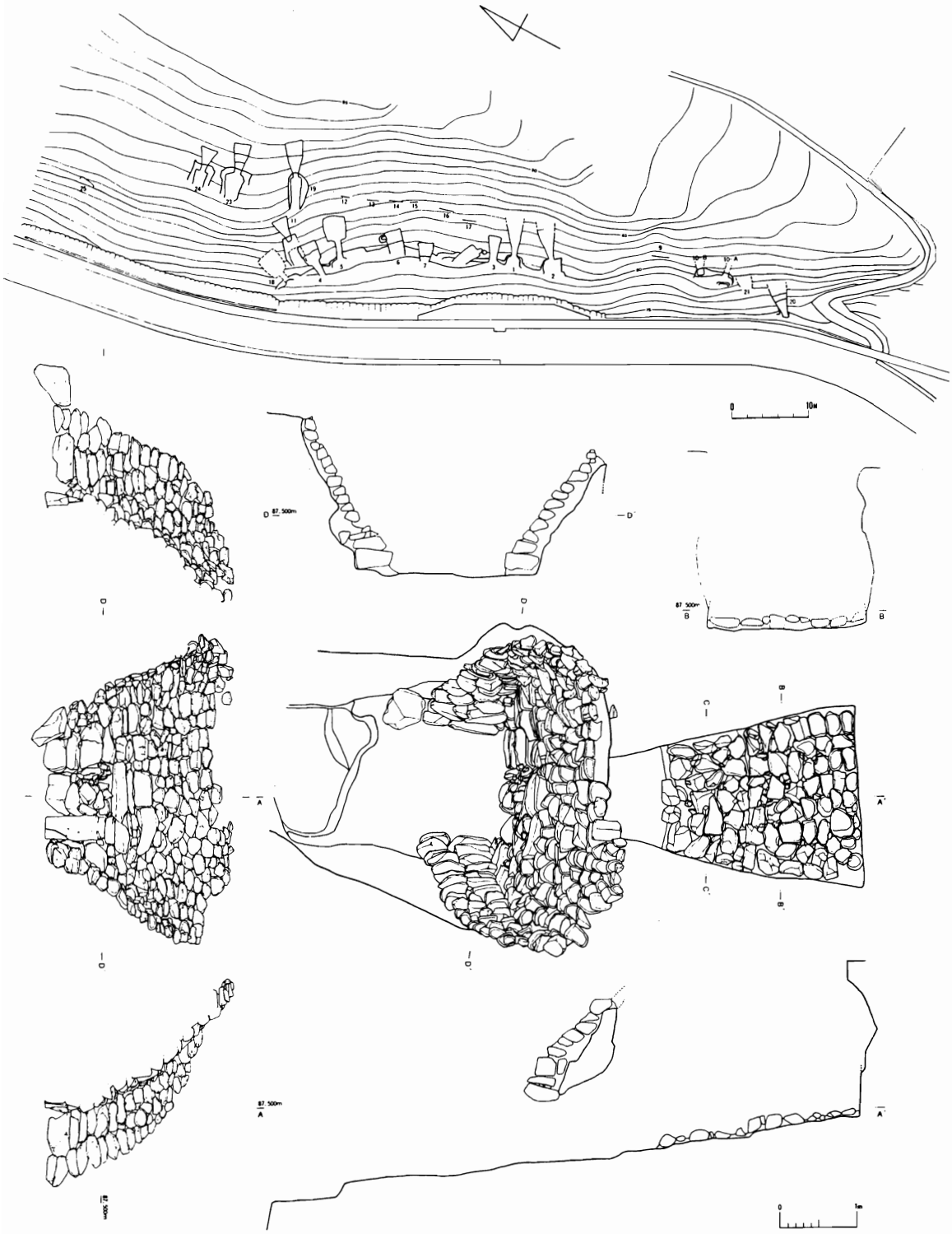


第２図　上粕屋・一ノ郷北遺跡横穴墓（文献２より）

からは27本の鉄鏃と直刀、小刀等の武器、輪鐙、鉸具といった馬具がまとまって出土した。馬具は上栗原遺跡第５号横穴墓でも壺鐙、鉸具、轡が出土している。これらの馬具は古墳の副葬品と比較しても遜色ないものである。それどころか鐙は県内の古墳からの出土も乏しく、それを持っていた被葬者の地位、それらが集中する三ノ宮地区の性格について慎重に考える必要がある。はたして古墳に葬られている人は横穴墓に葬られている人より地位の高い人物であったのだろうか。

これらの両遺跡から出土した遺物の時期は概ね７世紀中頃から８世紀にかかる頃に位置付けられる。両遺跡は地理的にも時期的にも非常に近い関係にあるが、須恵器の種類、武器類、装飾品の有無等に相違点も認められる。

次に前庭部の羨門部分に石積施設をもつ横穴墓を取り上げたい。これは県内では川崎市、座間市、厚木市、秦野市で計10基程が確認されている。伊勢原市域では３遺跡、５基を調査している。一ノ郷北遺跡（第２図）、下尾崎遺跡第19号横穴墓は羨門のある一面に石積がみられる。前庭部は幅が狭く、縦に長い形状となる。下尾崎遺跡第23号横穴墓（第３図）では羨門の両側の壁も含めた三方に石が積まれている。規模が大きく、前庭部の幅も広い。下尾崎遺跡第10号、上栗原遺跡第４・５号横穴墓の例は前庭部を共有する２つの横穴墓の羨門にまたがって石積がみられる。当然前庭部の幅は広くなり、広場のようである。いずれの横穴墓も石積は面を揃えて積み上げられており、しっかりと計算されて造られていることがわかる。これほ

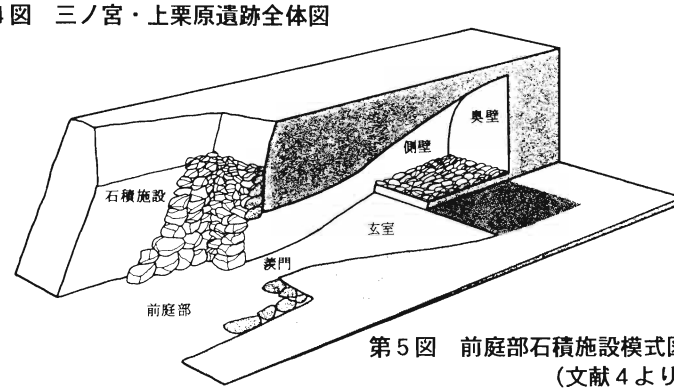


第３図　三ノ宮・下尾崎遺跡全体図及び第23号横穴墓（文献３より）

第４図　三ノ宮・上栗原遺跡全体図

どの労力を費やして構造上不必要ともいえるこのような石積施設をなぜ造ったのだろうか。その疑問を解く鍵は次の特性にあると考えられる。

それは市域の横穴墓が横穴式石室をもつ古墳の分布域の中に存在することである。一ノ郷北遺跡の東には鎧塚古墳群、下尾崎遺跡の位置する斜面上にはらちめん古墳、上栗原遺跡の尾根上にも横穴式石室が現存している。特に三ノ宮地区には武器、馬具等多くの副葬品が納められた古墳が数多く分布し、それらの年代も横穴墓のそれと部分的には重なると考えられる。つまり、横穴墓を造った人たちは古墳の存在を知っていたと判断せざるをえない。とすれば遺物、遺構のうえで両者の関連を示す要素があっても不思議ではないだろう。今や古墳と横穴墓の関係について正面から取り組む時期にきているのではないだろうか。



第５図　前庭部石積施設模式図
（文献４より）

今後の視点

伊勢原市域の横穴墓はやっとその一部が明らかになったところである。その少ない調査例から現時点で導きだせる特性を幾つか紹介させていただいた。伊勢原市域に横穴墓が数多く存在することは明白な事実となった。今後も調査例は確実に増加し、新たな展開がみられるだろう。伊勢原市域に混在する横穴墓と古墳、それに最近調査が進んできている集落を加え、一地域の中でそれら相互のつながりを追求していくことがこれからの課題である。

文献１　石野　瑛：1919　『考古集録』第三　名著出版
文献２　伊勢原市教育委員会：1990　『文化財ノート』第１集
文献３　伊勢原市教育委員会：1992　『文化財ノート』第２集
文献４　立花　実：1991　「三ノ宮・下尾崎横穴墓群の調査について」
1990年度東海大学史学会大会発表資料

鎌倉市内の横穴墓

継　実

武士の都として知られる鎌倉ですが、鎌倉時代の遺跡のみならず古代・先史時代の遺跡が市内各地で発見、または発掘調査がされています。今回のテーマである横穴墓も図－１にあるように、鎌倉市内各地に存在することがわかっており、しかも鎌倉市及びその周辺地域は県下でも有数の横穴墓密集地域です。しかしながら、これらの横穴墓も現在では開発などにより姿を消してしまったものが多く残念でなりません。

近年、鎌倉市内では非常に多くの発掘調査が行なわれていますが、こと横穴墓に関しては昭和20～30年代に赤星直忠氏・三上次夫氏らなどによりマッピングや簡単な調査が行なわれた他は本格調査は殆ど行なわれず、わずかに図－１の１．岩瀬上耕地遺跡と20．二ノ谷横穴群で平成２年度に、あいついで宅地開発による本格調査が実施されたのみであります。このうち今回は、岩瀬上耕地遺跡の横穴群について概略を述べたいと思います。

・岩瀬上耕地遺跡

所在地：鎌倉市岩瀬上耕地700 番地外

調査主体：岩瀬上耕地遺跡発掘調査団　　団長　田代　郁夫

調査面積：２８，６２４㎡

調査期間：平成元年12月～平成３年６月

調査目的：マンション建設に伴なう遺跡発掘調査

遺跡の立地と周辺の遺跡：本遺跡はJR大船駅の東方約１Km、鎌倉街道を見下ろす丘陵の西端に立地する。丘陵の北縁に沿って河幅3m程度の砂押川が流れる。遺跡の南側にあたるこの丘陵の大部分は既に宅地化されており、大規模な削平を受けていた。本遺跡の西方約３Kmのところには戦国期の山城である玉縄城がある。また、遺跡地の周辺には未だ分布調査の実施されていない横穴墓が点在する。

発掘調査によって横穴墓の他に、丘陵の頂上部及び北向きの斜面で縄文時代の集石・弥生時代～10世紀代の竪穴住居址27軒・時期不明の礎石建物址１棟，溝などが検出されている

横穴墓（図－２，３）

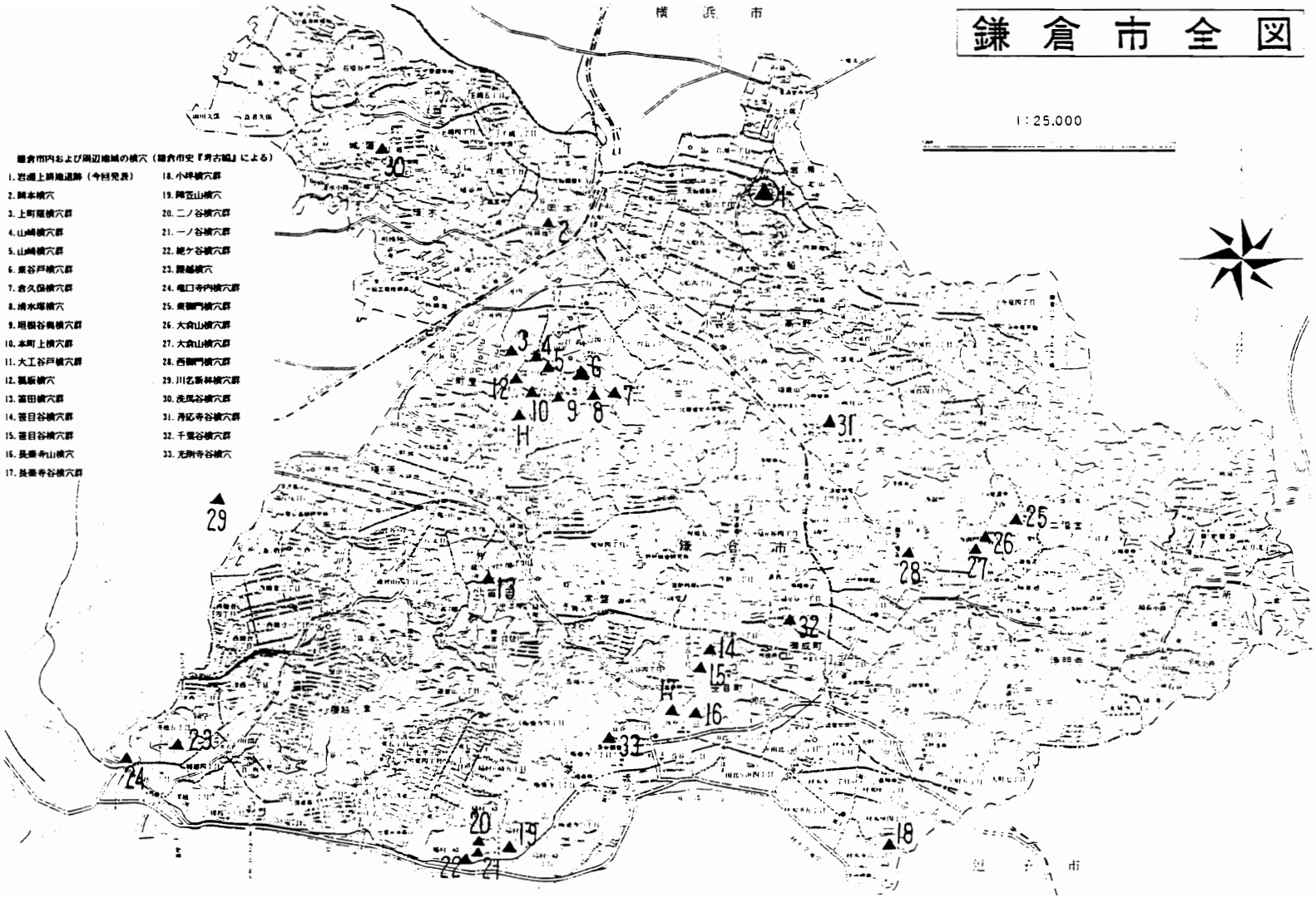
横穴墓の展開する斜面は北向きに開口した小谷戸を内包する。この谷戸内の東南に面した斜面岩盤上にのみ横穴墓が営まれている。

横穴墓は泥岩質の岩盤をくりぬいて作られており、合計21穴検出された。中央の小尾根を挟んで２群もしくは３群に別れ、北側に14基・南側に７基展開する。床面の標高は、19～40m である。調査を実施した時点では、横穴墓のほとんどが開口していた。横穴の遺存状態は、床部は殆どのものが良好であるのに対し、天井部が完全に残っているものは１基のみである（６号穴）。当遺跡の横穴墓の平面形は大別して、単純なバチ形平面のもの（3,4,6,12,13,18,21 号）・小型の棺座を持つもの（2,15,17 号）・玄室と同じ幅の棺座を持つもの（1,8,9,14,16 号）・棺室を持つもの（５号）・小型のもの（7,10,11 号）の５タイプに分別される。断面形は殆どがアーチ状で、小型のものは隅丸方形を呈する。小型のものを除き、側壁の残る全ての横穴の側壁にはいわゆる肋状痕が認められる。19～21号穴は現在の民家とほぼ同じレベルにある。20,21 号穴に関しては、天井部の崩壊や、後世の改変が甚だしく、横穴墓であった痕跡を一部に残すのみである。他の横穴をみても開口していたり、最近まで開口していたと思われる覆土が新しいものが多く、18号穴などでは家畜を繋いでいた駒繋という施設が側壁に設けられている。また、５号穴では、棺室入口を断面アーチ状から方形に改変されており、鎌倉でとりわけ検出例の多い中世の仏教施設である”やぐら”として転用された可能性がある。鎌倉の横穴ではこの

ような例がいくつか見られる。

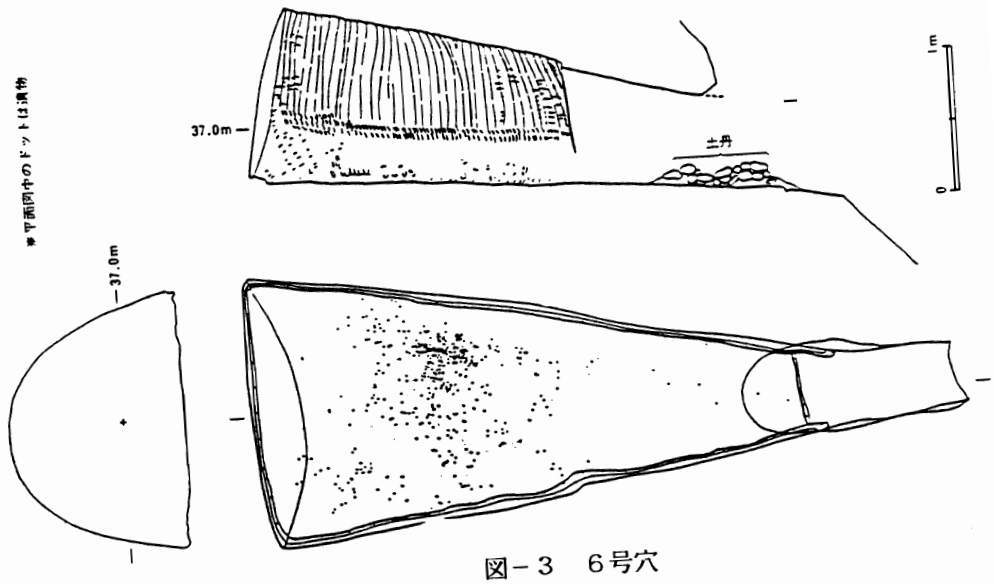
遺物の出土をみたのは6,7,10,11 号の４穴のみであった。このうち、６号穴は唯一、未開口に近い状態で検出された。調査中に発見されたもので、入口は土砂の崩落により埋まっていたが、内部には堆積土は殆ど無く、玄室床上から馬具・武具・装飾品（主に玉類）・土師，須恵坏などがあわせて500 点近く出土した。図－３にあるように遺物は玄室中央北寄りにやや集中するがこれはほとんどが玉である。他には歯なども検出されており、被葬者は一人で、北に頭を向けて埋葬されていた様子が窺える。また、他の横穴からは土師坏・須恵器の提瓶，平瓶の破片・原形不明の鉄製品などが少量出土している。

本遺跡の横穴墓の造営年代は出土遺物に乏しく、正確には把握できないが６世紀の末から８世紀の初頭が考えられる。



図－１鎌倉市内及び周辺地域の横穴墓

図－２横穴墓展開図



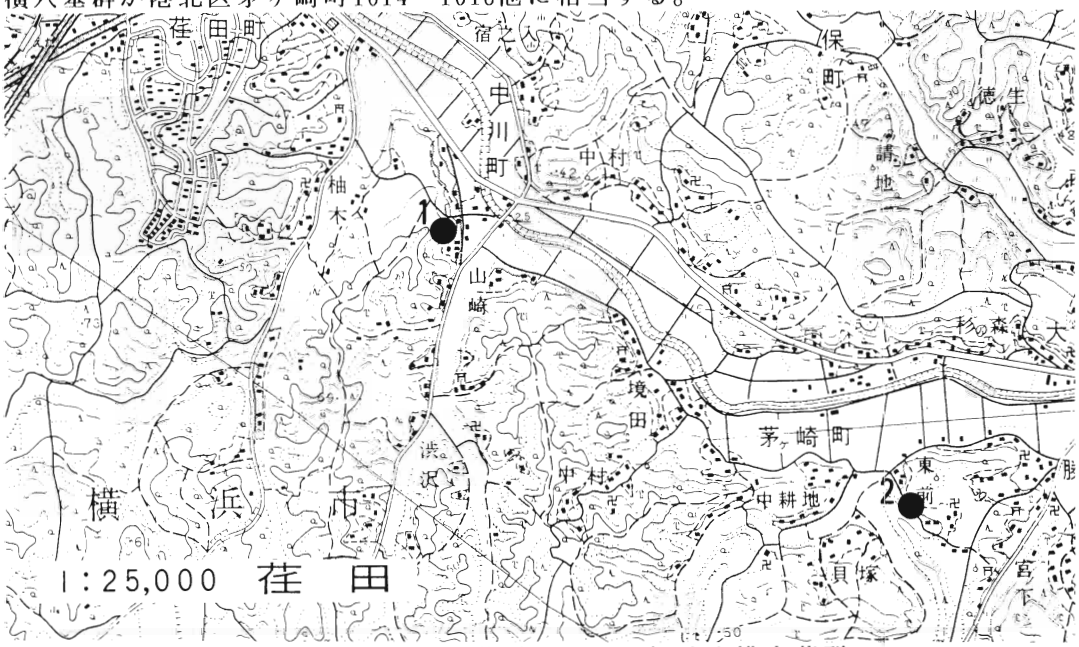
図－３　６号穴

横浜市矢崎山横穴墓群・綱崎山横穴墓群—早淵川中流南岸の２例—

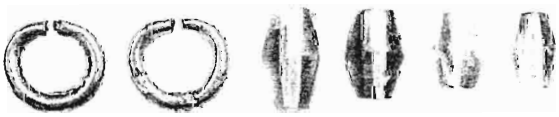
鈴木　重信

遺跡の位置

標記の２遺跡は，横浜市北部の港北ニュータウン地域内にあり，いずれも早淵川中流南岸に注ぐ支谷の出口付近に営まれている。矢崎山横穴墓群は，東急田園都市線江田駅の東南東約 1.5Kmに位置し，綱崎山横穴墓群はさらにその東南東約 1.8Kmに位置している。現在の地籍は，矢崎山横穴墓群が緑区荏田南４丁目付近，綱崎山横穴墓群が港北区茅ヶ崎町1014・1018他に相当する。

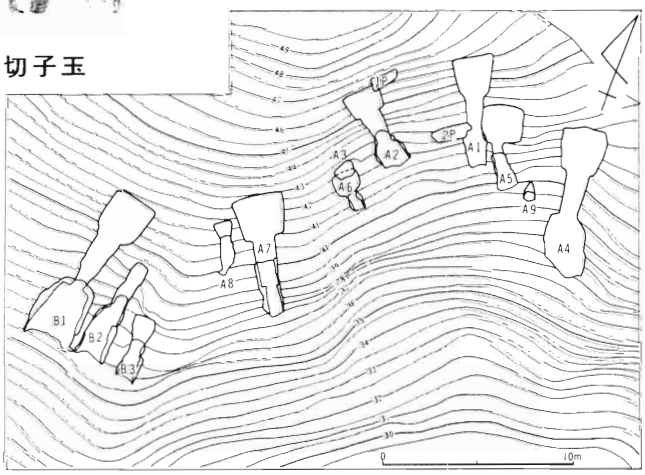


１：矢崎山横穴墓群　　２：綱崎山横穴墓群



矢崎山Ａ７号墓出土の耳飾と切子玉

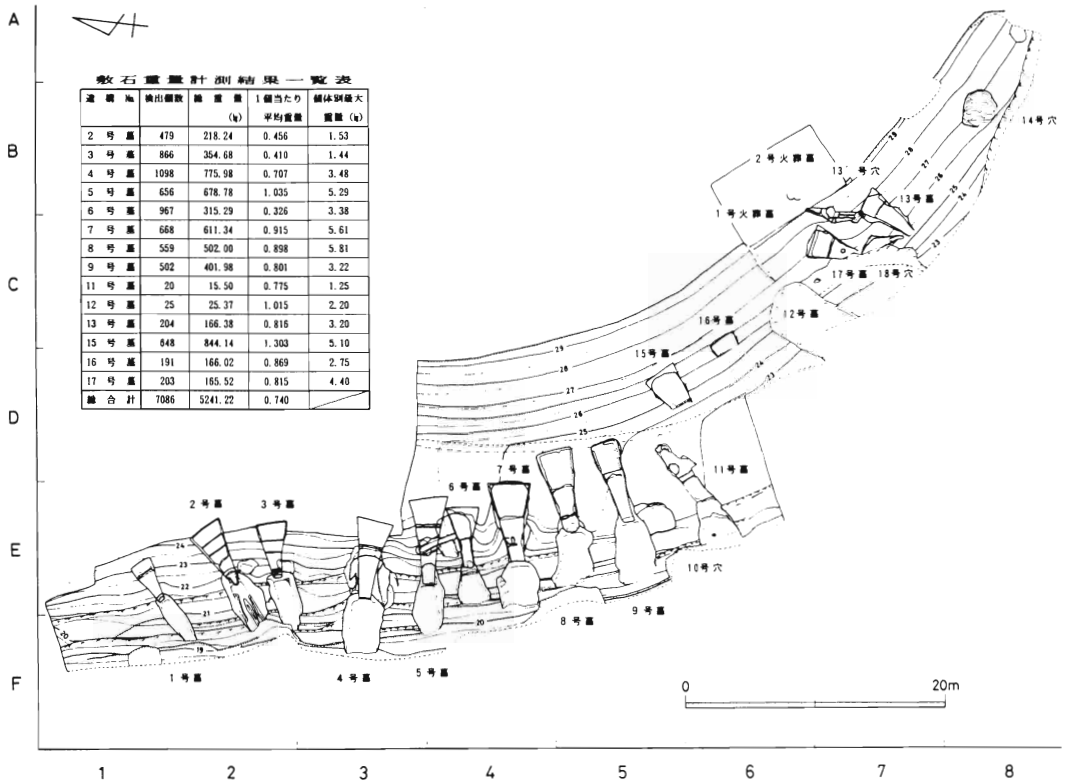
矢崎山Ａ２号墓出土の土器類



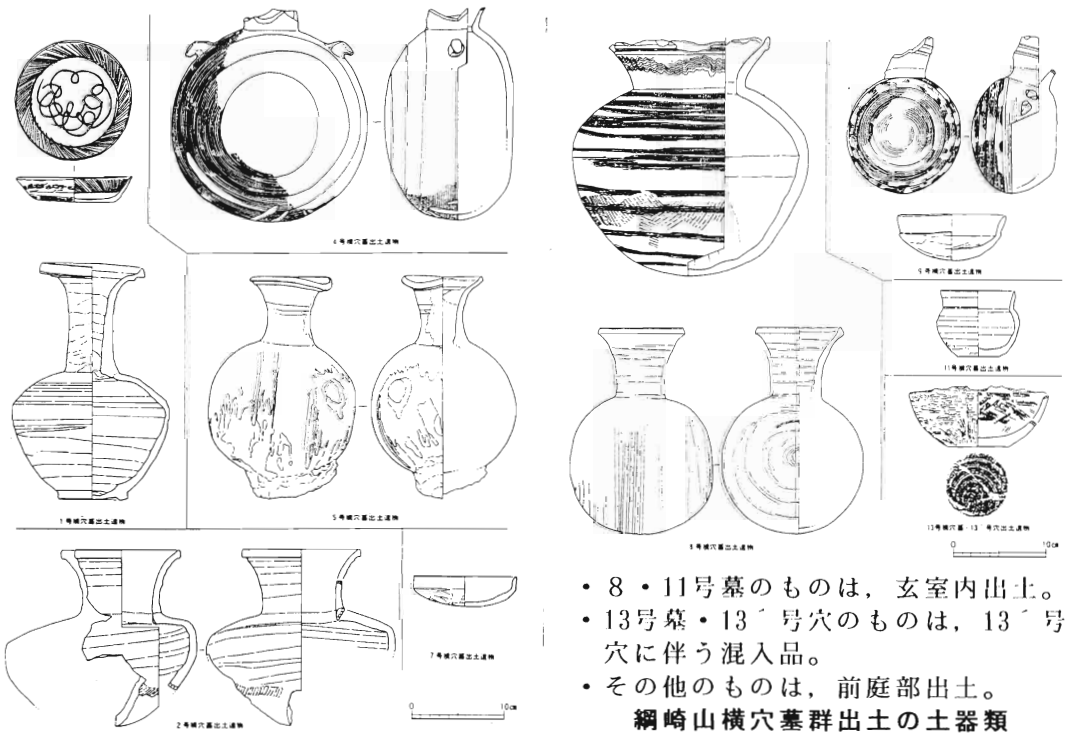
矢崎山横穴墓群Ａ・Ｂ群全体図

敷石重量計測結果一覧表

遺構名	検出個数	総重量 (kg)	1個当たり平均重量	個体別最大重量 (kg)
2号墓	479	218.24	0.456	1.53
3号墓	866	354.68	0.410	1.44
4号墓	1098	775.98	0.707	3.48
5号墓	656	678.78	1.035	5.29
6号墓	967	315.29	0.326	3.38
7号墓	668	611.34	0.915	5.61
8号墓	559	502.00	0.898	5.81
9号墓	502	401.98	0.801	3.22
11号墓	20	15.50	0.775	1.25
12号墓	25	25.37	1.015	2.20
13号墓	204	166.38	0.815	3.20
15号墓	648	844.14	1.303	5.10
16号墓	191	166.02	0.869	2.75
17号墓	203	165.52	0.815	4.40
総合計	7086	5241.22	0.740	



網崎山横穴墓群全体図



- 8・11号墓のものは，玄室内出土。
- 13号墓・13´号穴のものは，13´号穴に伴う混入品。
- その他のものは，前庭部出土。

網崎山横穴墓群出土の土器類

遺 跡 概 要

a　矢崎山横穴墓群（1976年11月~1977年3月，港北ニュータウン埋蔵文化財調査団調査）

横穴墓群は，古墳時代中・後期の集落址を含む矢崎山遺跡南側（仮称Ｃ群）とさらにその南側斜面部（Ａ・Ｂ群）に発見された。Ａ・Ｂ群は地山の稜線によって分けられる。上総層群を掘り込んで築造されており，Ｂ群が低い位置にある。Ａ群は９基あり，１群１～３基からなる３ないし４単位群が認められる。中にはＡ９号墓のように，いわゆる「ミニ横穴」が認められる。また，横穴墓群と近い時期に掘り込まれたと見られる性格不明の土坑２基が含まれている。Ｂ群は３基からなる１単位群で，Ｂ２号墓は玄室平面形と内部の整形状況から築造途中で放棄されたものである可能性が高い。Ｃ群は，集落部に１基離れて存在する。関東ローム層を掘り込んでおり，遺物は出土しなかった。形態的には末期のものである。

年代は，ほぼ６世紀末から７世紀代を中心とするとみられるが，「ミニ横穴」の存在から一部８世紀代に及ぶものが含まれている可能性がある。Ａ７号墓，Ｂ１号墓には「前壁」や明瞭な「袖部」（玄門）が認められ，旧く位置づけられる。この他，形態的にはＡ１・４号墓なども旧く位置づけられる。

b　綱崎山横穴墓群（1992年7月~10月，横浜市埋蔵文化財センター調査）

横穴墓群は，古墳時代後期の集落址と後期の円墳２基を含む綱崎山遺跡南西斜面部に発見された。15基あり，すべてが関東ローム層に掘り込まれていた。これらは地形により南・北の２群に分けられ，南群５基（12・13・15～17号墓），北群10基（１～９・11号墓）からなる。支谷の出口側に位置する北群が，南群より相対的に低い位置に築造されている。いずれも１群２～３基よりなる単位群で構成されているとみられ，北群で４単位群，南群で２単位群の存在が考えられる。なお，北群には性格不明の土坑状落ち込み１基が検出されている。

各横穴墓の形態的な特徴は，いずれも「袖部」（玄門）が不明瞭で，「前壁」が認められない点である。玄室横断面形は，矢崎山横穴墓群同様アーチ形を呈しており，１号墓を除いて敷石が認められた。４・５・15号墓などが旧く位置づけられる。

年代は，出土遺物や形態的な特徴から７世紀初頭ないし前半から８世紀初頭に及ぶものと考えられ，矢崎山横穴墓群より後出するとみられる。

特 記 事 項

綱崎山横穴墓群，１号墓前庭部出土の土師器盤状坏は胎土・調整手法等から搬入品（畿内産？）と考えられる。比較的新しく位置づけられる同３号墓は，未開口であったが，副葬品は皆無であり，小児骨１体のみが遺存していた。家長の死を契機として墓づくりがなされない場合のあったことを示唆する点，興味深い。

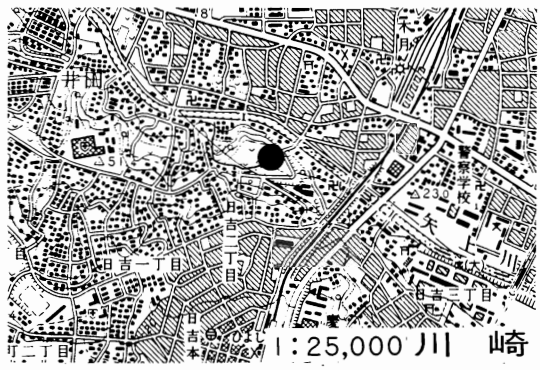
横浜市矢上上ノ町横穴墓Ｂ支群

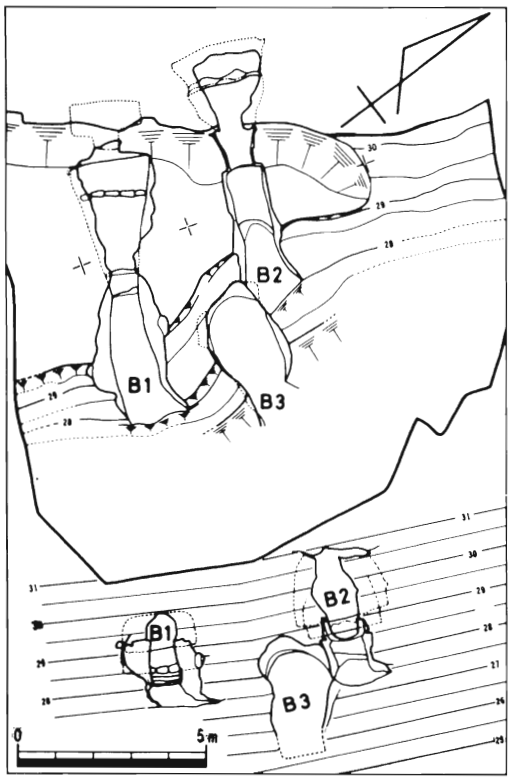
鈴木　重信

遺跡の位置

横浜市北部，川崎市と市堺を接する港北区日吉２丁目 256～ 260番地他に所在する。東急東横線日吉駅の北方約 500m，矢上川を眼下に望む小支谷奥部の東斜面に位置する。

この横穴墓群の南東約 150mには，著名な中期古墳である矢上古墳が存在した。また，この台地上には弥生時代後期～古墳時代前期・古墳時代後期の住居址群の存在も知られている。





矢上上ノ町横穴墓B支群全体図

遺跡概要

この横穴墓群は，同一の支谷に形成された2つの単位群からなり，それぞれ3基で構成されるものと考えられる。支谷の出口付近の一群をA支群とし，奥部の一群をB支群とする。A支群は上総層群を，B支群は関東ローム層を掘り込む。

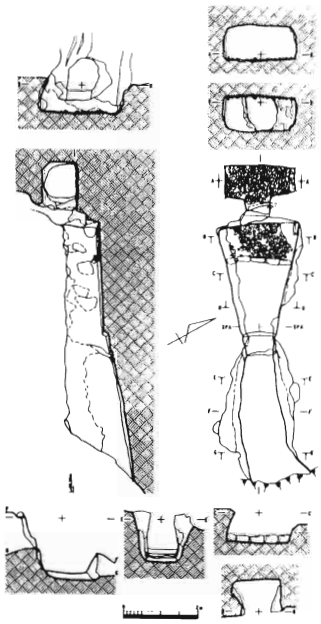
調査は，1942年と1961年に慶応義塾の関係者により行なわれ，さらに1984年に横浜市教育委員会が行なった。1942年にはA支群の2基が調査され，1961年にはA・B支群の各1基が調査された。1984年にはB支群の3基が調査されたが，このうち2号墓が1961年に調査されたものであった。

B支群3基のうち，1号墓の構造はこの地域では特異なものであった。「袖部」（玄門）の不明瞭な空間（玄室？）のさらに奥に小規模な「棺室」が設けられており，ここに壮年男女各一体と性別・年齢不詳の一体の計三体分の人骨が遺存していた。閉塞は，棺室の前面でなされていた痕跡をのこしており，板状に面取りしたシルト岩が用いられていた。2号墓は，単室構造のもので，玄室奥壁に沿って棺座状の段が設けられている。玄室の「前壁」は認められず，「袖部」も不明瞭な形態である。ともに副葬品などの遺物は発見されなかった。3号は十分な調査ができなかったが，整形痕などから築造途中のものである可能性が高い。

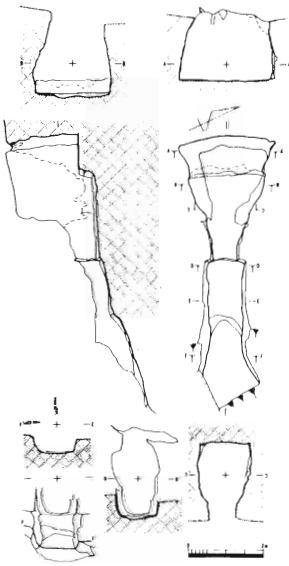
年代は，A支群より後出し，7世紀中頃以降と考えられる。

特記事項

1号墓のような棺室構造の横穴墓は，この地域では極めて希で，川崎市夢見ヶ崎横穴墓例の1例のみである。また，栄区の狐川流域には濃密な分布が認められるが，これらとは構造が異なっている。最も類似する構造のものは，横須賀市佐野町3号穴（墓）に見られる。この種の構造をもつ横穴墓の分布が注目される。



B1号墓実測図



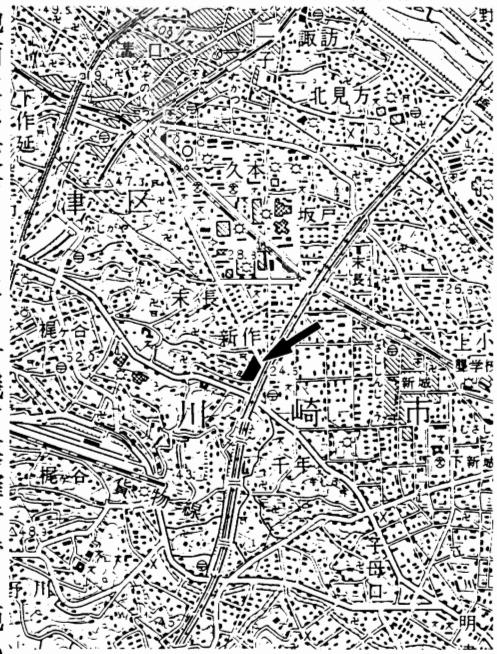
B2号墓実測図

川崎市間際根（まぎわね）横穴墓群

田村良照

位置）　遺跡は川崎市高津区新作 1,402番地ほかに所在し、ＪＲ南武線武蔵溝之口駅の南南西1.75km、同武蔵新城駅の西南西 1.3kmに位置する。地形的に見ると、このあたりは多摩丘陵と多摩川右岸の沖積地とのちょうど交換点にあたる地域で、沖積地にむかって東方に張り出した丘陵先端部に本横穴墓群はつくられている。現地に立つと東方に第３京浜、市立橘中学校を眼前に臨むことができ、また史跡影向寺は南方約 800mの距離にある。

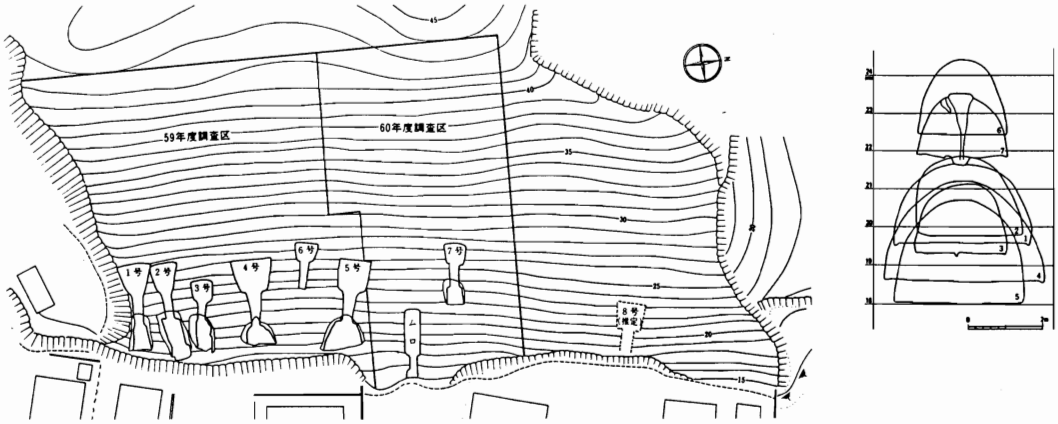
遺跡概要）　急傾斜地崩壊対策工事中に１号墓の玄室側壁に穴が開いたことが発見の契機となり、昭和59年と同60年の２回にわたって調査が実施された。その結果、７基の横穴墓が発見され、さらに調査区域外にも１基を確認した（第２図）。調査終了後、工事と並行して保存処置がなされ、現地に行くと現在でもその外観を眺めることができる。



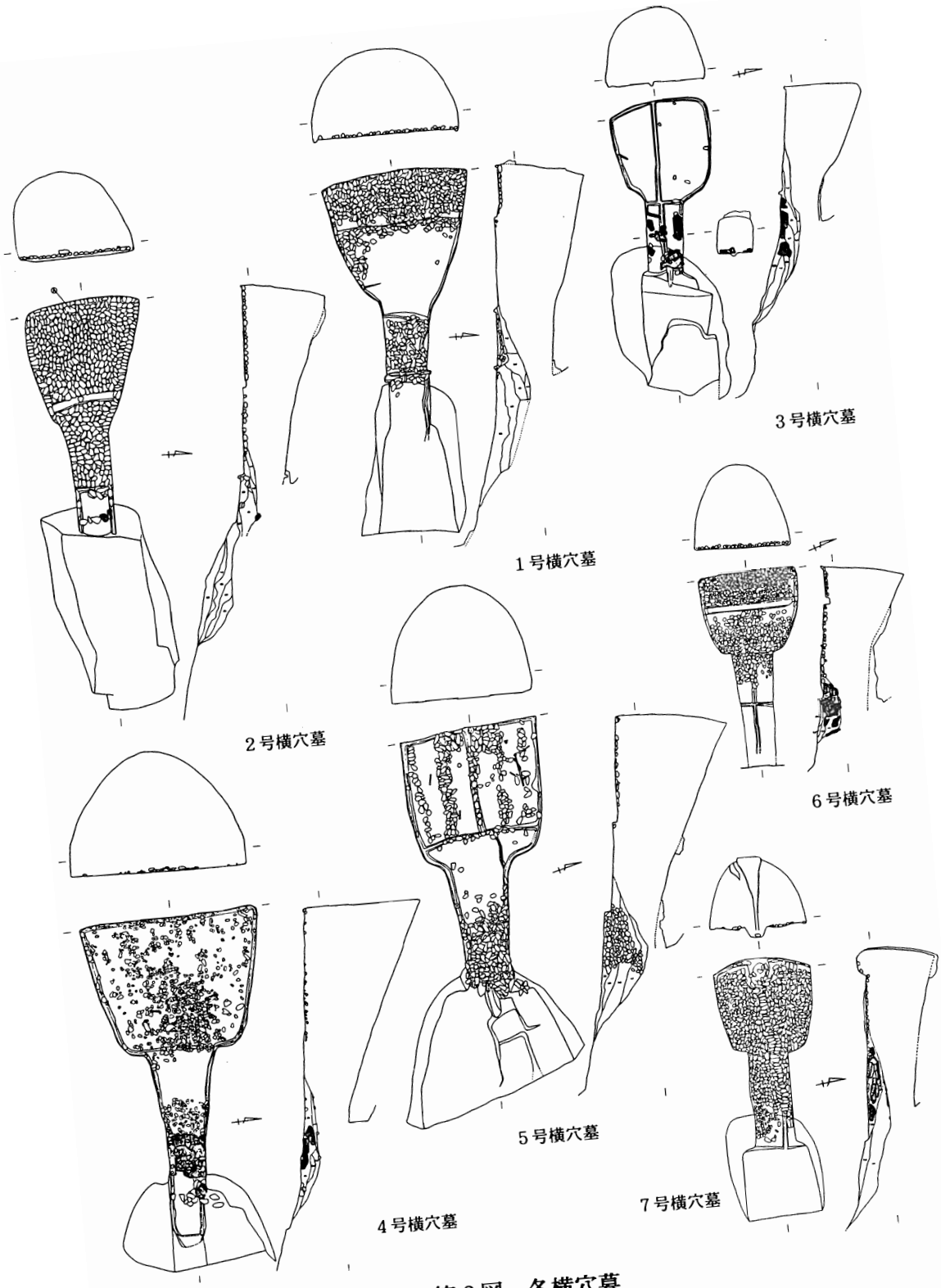
第１図．遺跡位置図

本横穴墓群は標高19m～22m、幅55mの範囲に凝灰岩層を掘削して２段に造営されている。分布範囲はさらに南北方向と斜面下方に広がることが予想されたが、その可能性が残るのは東方向だけである。この７基の横穴墓は堆積土ですかっり埋没していたため未周知であったが、調査の結果、いずれも一旦開口ないしは盗掘されたものであることがわかった。しかし遺存状態は良好な上、３号墓以外の横穴墓からは人骨と比較的豊富な副葬品（第４・５図）が出土し、川崎市域にあっては代表的な横穴墓群のひとつと言える。

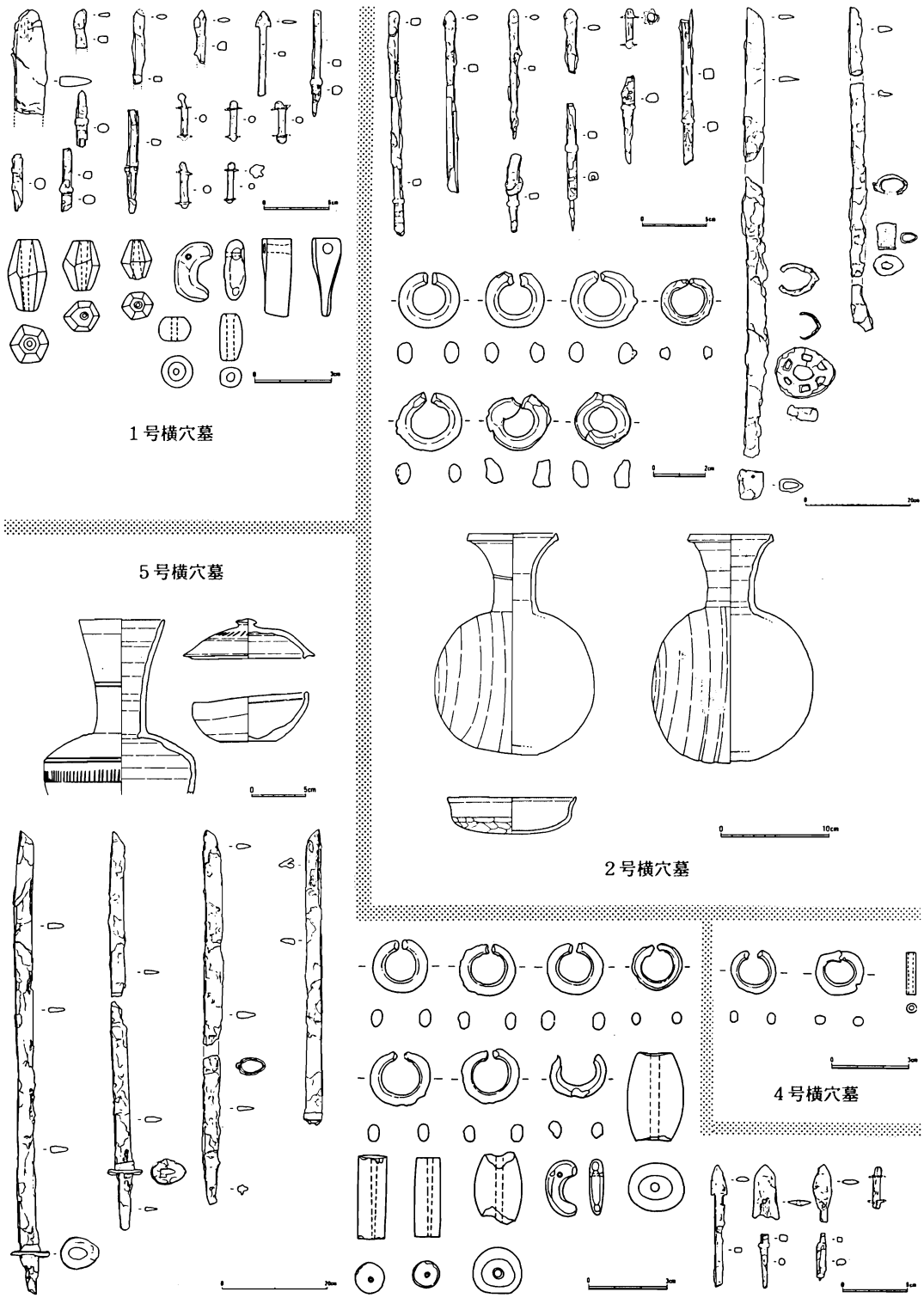
つぎに各横穴墓について概観してみよう。まず形態的には多少の差異はあるものの、平面形が有袖式で天井が奥壁に最高値をもつ横断面ア－チ形の玄室に、比較的長めの羨道が連結する構造が、本横穴群に共通した特徴である（第３図）。墓道は幅広のものと狭長な２タイプがある。詳しく見ると、主軸線を中心にして左右対称



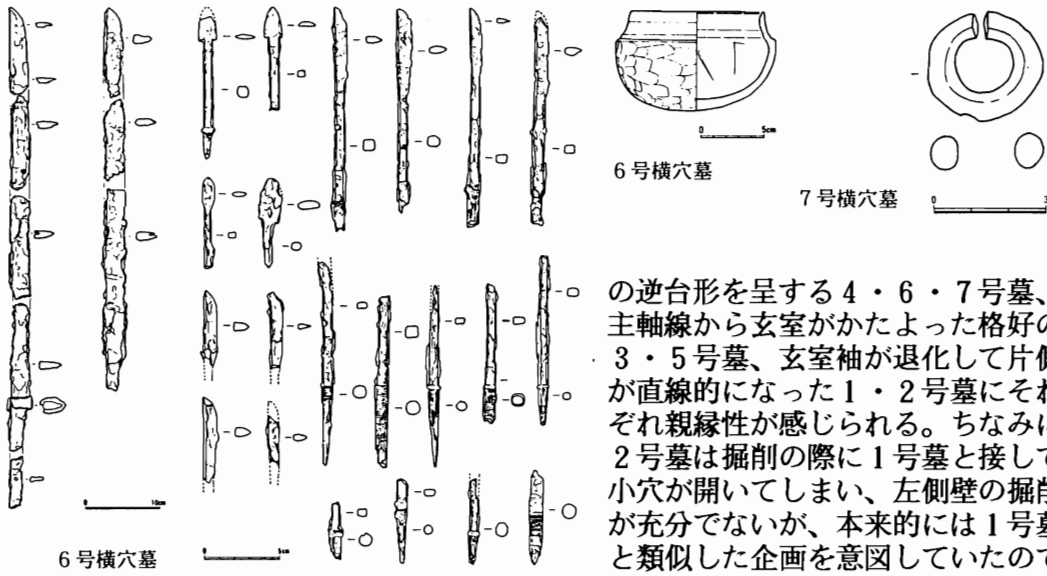
第２図．横穴墓分布図



第3図. 各横穴墓



第4図. 出土遺物（1）



第5図. 出土遺物（2）

の逆台形を呈する4・6・7号墓、主軸線から玄室がかたよった格好の3・5号墓、玄室袖が退化して片側が直線的になった1・2号墓にそれぞれ親縁性が感じられる。ちなみに2号墓は掘削の際に1号墓と接して小穴が開いてしまい、左側壁の掘削が充分でないが、本来的には1号墓と類似した企画を意図していたのではないかと見られる。

規模的には4号墓と5号墓が卓越している。4号墓は玄室内面積が11.3㎡、奥壁高は2.83mの規模がありいっぽう5号墓は玄室内面積 9.8㎡、奥壁高 2.7mで、ちなみに畳に換算すると4号墓が7畳、5号墓が6畳の床面積を有するきわめて大きな横穴墓である。こうした玄室規模に加えて、群中での配置あるいは前庭部の規模の大きなことを勘案すると、4号墓と5号墓が盟主的な存在であると考えられる。このうち5号墓には往時の葬制の一端を示す貴重な資料が残されていた。まず一つには、床面の敷石を組み直し、主軸方向に4体分を安置できるように石で仕切りを設け、そして不要になった石は閉塞石に転用した状況が認められた。つまり複数を埋葬するために玄室内を整頓したのである。事実、4人の埋葬を傍証する副葬品として、金銅製の耳環が7個と直刀4本が出土した。もう一つの興味深い発見は、棺座前端部の天井には左右にフック状の金具が打ち込まれ、そこに幔幕のような布が懸けられていた痕跡が見つかったことである。このような事例は県内ではもちろん初めてであるが、宮城県の追戸A地区横穴墓、群馬県高崎市の観音塚古墳などに類例が認められ、もともと古代中国、朝鮮半島から伝わった風習であるとされる（注1）。

構造と特徴的な施設について見てきたが、それでは本横穴墓群はどのような順番につくられて結果的に群集をみるにいたったのか、そして造営時期はいつごろなのであろうか。まず盟主的存在の4号墓・5号墓のどちらかを初源として造営がはじまったのは確かであろう。時期的には5号墓の追葬遺物ととらえられる須恵器が7世紀中頃の製品であるので、7世紀前半まで遡る可能性が高い。これを追って3号墓・6号墓・7号墓・1号墓がつくられ、最後に1号墓と3号墓の空閑地に無理やり入り込んだ格好の2号墓の造営をもって終焉したと考えられる。2号墓の土師器坏が7世紀第3四半期(650年～ 675年頃）を示すので、本横穴墓群の造営期間は7世紀前半～第3四半期と見られ、その後に追葬が行われたとしてもおそらく7世紀末までには使用を停止したと推定される（注2）。

注1．村田文夫1993「古代の南武蔵」有隣新書、の中で詳しく紹介されている。

注2．田村良照1986「川崎における横穴墓群の調査－間際根横穴墓群」の考察ににおいて筆者は異なる見解を示したが、上記のように訂正したい。

多摩川流域の横穴墓

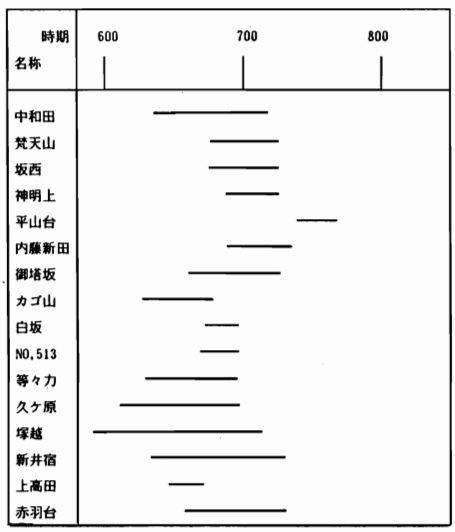
松崎　元樹

分　布　多摩川上流域においては日野市・多摩市を中心として、浅川や大栗川の支流域に派生的に分布する。また、武蔵国分寺跡付近の崖沿いからも検出されている。中流域では三鷹市・調布市・世田谷区北西部を流れる野川・仙川などの支流に沿って認められる。各群の規模はそれ程大きくはない。下流域の左岸地域は南武蔵屈指の横穴墓密集地帯で、世田谷区東南部および大田区を中心とする。大田区内においては、これまでに確認された数は250 基程度で、実際はその数倍が掘削されていたと推測されることから、両地域を合わせると１千基にも及ぶと考えられる。当該地域の横穴墓群は、おおむね段丘崖や台地斜面の関東ローム層中に掘削されており、３～４基から十数基を１つのグループとして、広域に支群を形成するようである。

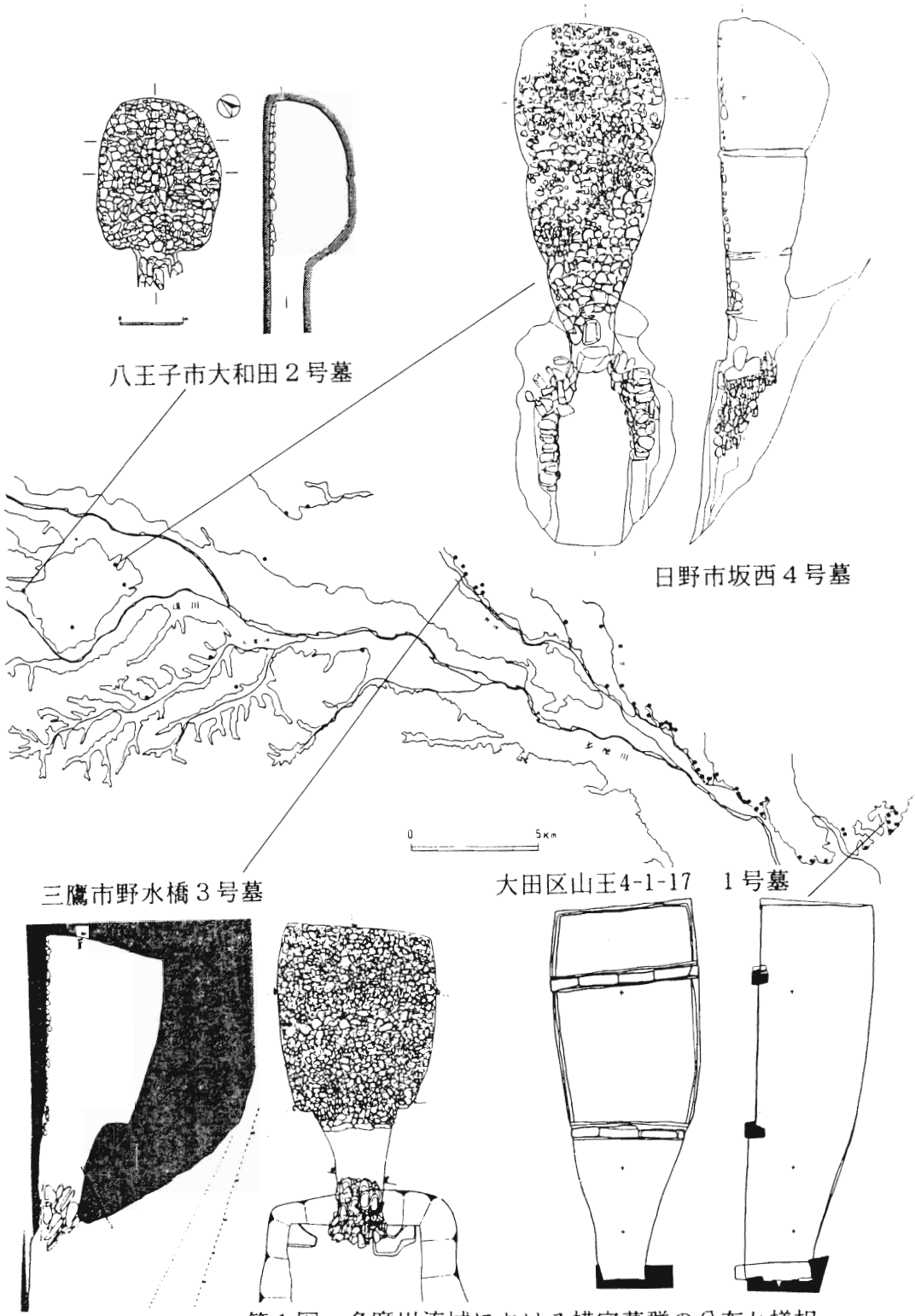
墓室の形態　上流域では墓室側壁に胴張りを有する瓢形のプランを有する横穴墓が特徴的に認められる。また、羨道と玄室とが明確に区分できる矩形を呈する例も多くある。さらに、羨門外の墓道側壁と上部に石積み施設（護石）を有するものが存在する。このような施設は相模川水系の横穴墓中にも見られる。中流域では主に方形プランを有する横穴墓が多く見られ、比較的大きめの川原石により、玄室を区分するものもある。下流域においては、その分布範囲の広さから多様な墓室形態が認められる。最も主体的に見られる形態は、玄室と羨道との区別のない撥形あるいは徳利を半裁したような形状を呈するものである。客体的に方形プランを有する例もあり、複室構造を示すものも存在する。また、玄室内に組合式の石棺を内蔵する例があり、多摩川右岸の川崎市域との関連も窺われる。墓室には川原石を敷き、凝灰岩の切り石により区画を設けるものが多い。さらに、当該地域の特質として挙げられるのは、羨門を重厚な凝灰岩加工石によって二重に構築する点で、この構造はある時期普遍的に採用されたものと考えられる。

遺　物　本地域の場合、横穴墓数に比して出土遺物は極めて少ない。主な遺物としては須恵器のフラスコ形長頸壷・平瓶・台付長頸壷をはじめ、少量ながら暗文の土師器坏も出土している。この他、武器類として鉄刀・鉄鏃・弓金具等がみられる。また、金銅荘大刀（頭椎大刀・円頭大刀）や銅鋺・馬具などの副葬品を有する横穴墓の存在は注目できる。非常に稀な例ではあるが、大田区塚越14号横穴墓は終末期の前方後円墳の副葬品と比べても、何ら遜色のないものであり、被葬者の性格を知る上で興味深い内容を示している。

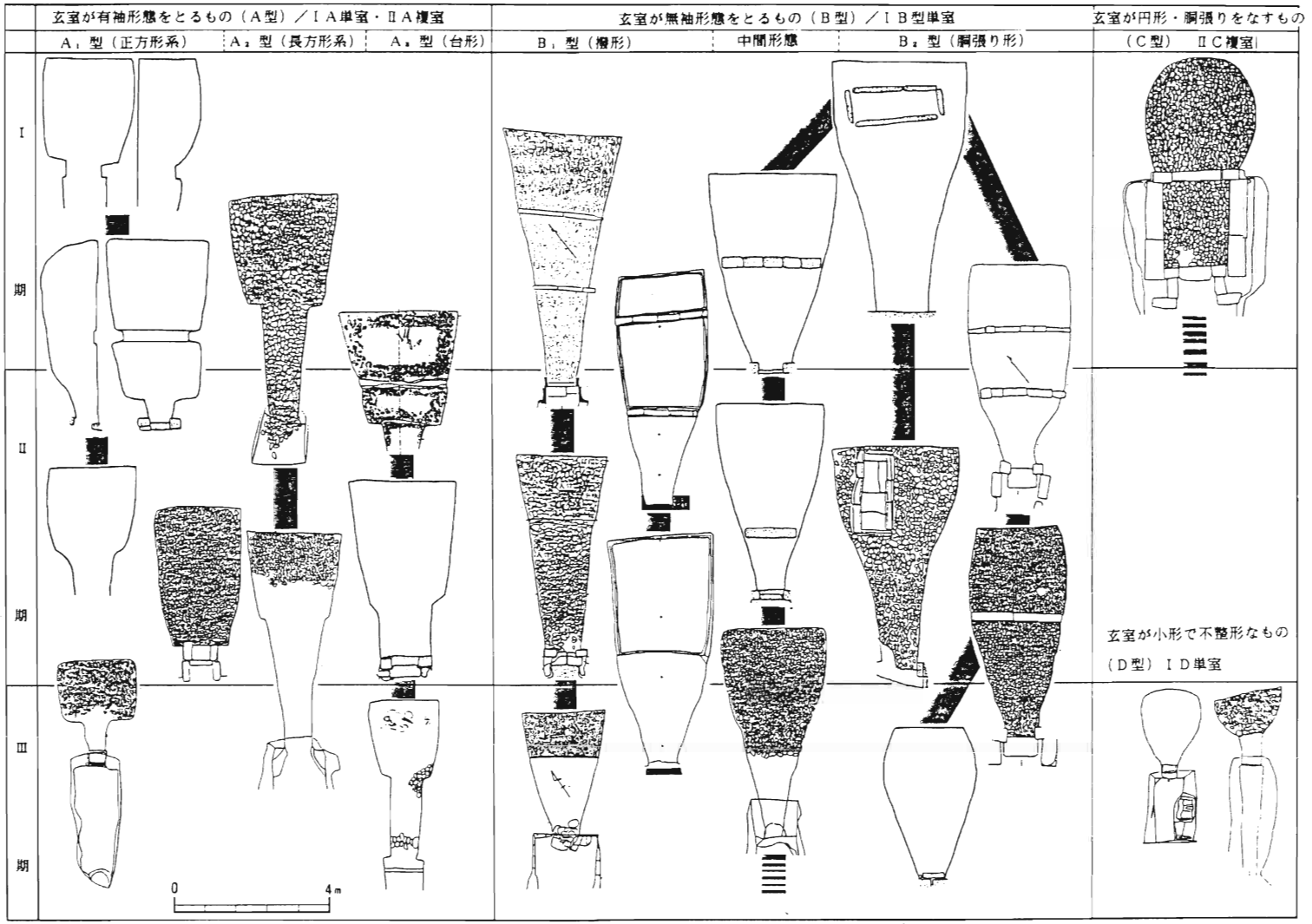
造営時期　出土遺物の様相から多摩川流域における横穴墓群は、６世紀末葉から７世紀初頭頃出現したと考えられる掘削のピークは地域によって若干異なるが、搬入土器の在り方より７世紀中葉～後葉にかけて求められよう。７世紀の末に新たに形成される横穴墓群も認められるが、大部分は８世紀初頭でつくられなくなる。以後、追葬行為や改葬などにより、８世紀前半頃までは何らかの形で墓が継続して営まれていたと考えられる。



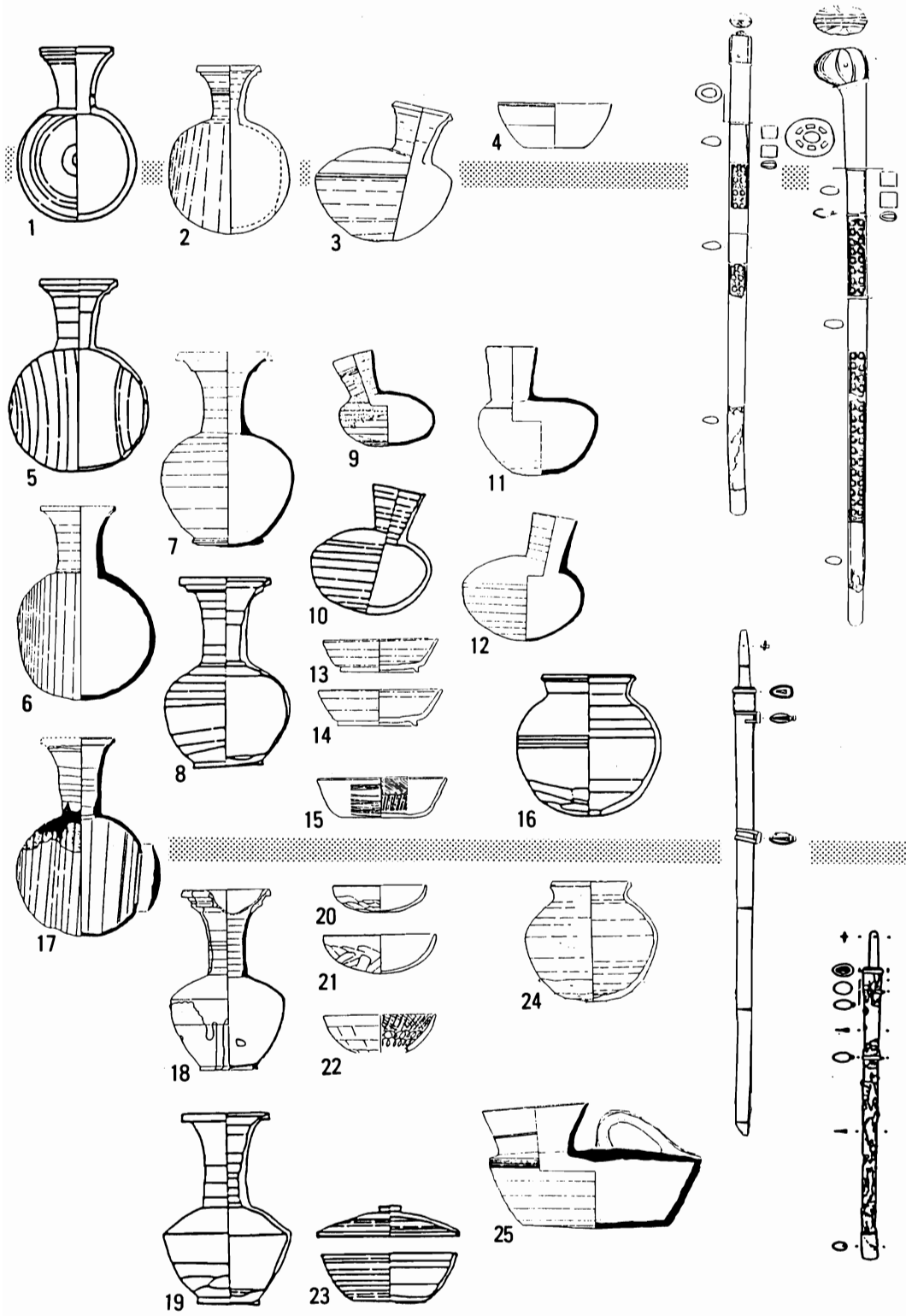
主要な横穴墓群の存続期間
（池上1982年に加筆）



第１図　多摩川流域における横穴墓群の分布と様相



第２図　多摩川下流域における横穴墓の諸形態



第３図　多摩川流域における横穴墓出土遺物の変遷

まとめ

横穴墓研究から何が分かるか

立正大学助教授
池上　悟